

『硯北日録』——翻刻・訓読・略注と人名索引(一)

揖斐 高
日野 俊彦 山口 旬
藤井 美保子 三浦 億人
高橋 昭男 蔡 維鋼
松原 梨佳 結城 俊治

解題

一 成島柳北の日記

成島柳北は十七歳の嘉永六年から、没年の明治十七年まで、途中何年かの空白年があるものの、日記をつけていた。ある時期までそれは次のような表題がつけられて、遺されていた。

○無題Ⅱ嘉永六年(十七歳。部屋住の時代)

○硯北日録Ⅱ安政元年～万延元年(十八歳～二十四歳。將軍侍講見習から侍講在任)

○投閑日録Ⅱ文久三年～元治元年(二十七歳～二十八歳。侍講罷免)

後の屏居の時代)

○春声楼日乗Ⅱ慶応元年～慶応三年(二十九歳～三十一歳。屏居から陸軍出仕)

○太田宮公私日乗Ⅱ慶応二年～三年(三十歳～三十一歳。陸軍出仕)
↓春声楼日乗と重なる。

○航微日記Ⅱ明治二年(三十三歳。隠棲。大阪から山陽地方への紀行文)

○庚午日乗Ⅱ明治三年(三十四歳。隠棲)

○辛未日録Ⅱ明治四年(三十五歳。東本願寺学塾の学長)

○航西日乗Ⅱ明治五年～六年(三十六歳～三十七歳。欧米視察旅行の紀行文)

○澤上日乗 明治十一年～明治十七年(四十二歳)～四十八歳。朝野新聞社長)

これらの日記は柳北の孫にあたる大島隆一氏の『柳北談叢』(昭和十八年刊)に記載されている時点までは確実に現存していたが、東京大空襲や戦後の混乱期に大多数が失われた。原本が伝存するのは『視北日録』と『投閑日録』のみで、他は『航微日記』と『航西日乗』のみが活字翻刻の形で伝存している。ちなみに永井荷風は、昭和元年から二年にかけて、当時現存し、大島隆一氏によりもたらされた柳北の日記をすべて筆写したが、その写本は昭和二十年の東京大空襲によって灰燼に帰した。

昭和四十九年、失われたものと考えられていた『視北日録』と『投閑日録』が古書店に出て、前田愛氏の所有するところとなったが、この時点で『視北日録』の安政六年分は欠けていた。平成九年、太平書屋によって現存『視北日録』と『投閑日録』が影印刊行された。

今回はそのうちから柳北十八歳の嘉永七年(安政元年)分の翻刻と訓読、略注と人名索引を発表することにした。

二 『視北日録』の書誌

安政元年分原本の書誌を記す(前田愛「成島柳北の日記」、『文学』一九七五年二月・三月号所収による)。

○共表紙、用紙は無罫の半紙、こよりを用いた袋綴の装幀。
○縦二一・五センチ×横一三センチ。四六丁。
○表紙の記載

嘉永七年歳次甲寅

安政元年

視北日録

孟春之月元日起毫

一
温歳十八

○内題 「甲寅日録」
○本文 墨書 漢文体
○末尾 「確堂主人」

以下万延元年までの六冊とも同じ装幀であり、サイズ、丁数に異同はあるものの、漢文体で一日も欠かさずに記録されている。但し、万延元年分は十二月九日で擱筆されている。

三 『視北日録』の内容

『柳北談叢』によれば、嘉永六年の八月より柳北は日記をつけはじめているが、このときはまだ部屋住の身であった。ところが、この年の十一月に父親の稼堂が没し、にわかにか家督相続の問題が浮上してきた。『視北日録』一』の安政元年(一八五四)の一月十二日には、早くも江戸城に召し出され、次のような命を賜ったことが記載されている。

阿部勢州伝命拜両番格奥詰試守父職賜俸三百石新部屋

「老中阿部正弘よりの伝達で、両番格の奥詰試（家代々の侍講職の見習）に任命するから、父の職を守って勤めるように、俸禄は三百石で新部屋を賜る」ということで、柳北は十八歳にして將軍侍講見習として勤務することになる。安政三年（一八五六）の十一月には正式に將軍侍講に就任し、文久三年（一八六三）、狂詩を賦して幕閣を諷刺したかで職を解かれるまで、七年の間その職にあった。

江戸城は公式の政務が執り行われる「表」と、將軍の日常生活の場である「奥」、そして徳川家の女性たちが起居する「大奥」に分れるが、柳北の勤務するところは「奥」である。「大奥」との出入りは厳重に鎖されていたが、「表」との出入りも厳しく制限されていた。奥儒者にしろ奥医師にしろ、あくまで將軍の私的な住居空間が彼らの居場所なのであり、言い換えれば公式の政務からは遠ざけられていたということである。したがって記録されているのは、あくまで柳北が関係する城内の公式行事と、「奥」における柳北の勤務状況であり、政治的発言や感想などは、全くといってよいほど控えられている。

日記に「登管」「登殿」「直管」などと記載されているのは、登城した日であることを示している。年により変動はあるが、おおむね月次三日（朔日、十五日、二十八日）と五節句には、登城し將軍に拝賀しなければならぬ。また月に五日ほど当直の番があった。そして、当直明けの日は湯島の昌平齋にあった実紀局に向き、『徳川実紀』編纂の監督をおこなった。見習中は將軍に進講することはない

が、先輩の小林栄太郎が毎月二十日に『孟子』の進講をするときには、臨席する義務があり、これを「次講」と記載している。侍講に就任してからは登城の回数も増え、万延元年の一年間の記録を通算すると、登城一六五回、侍講一一五回に及んでいる。六月、七月には乾府とよばれる場所で、曝書の監督をおこなった。これは將軍歴代の蔵書を保管する紅葉山文庫とは別の書物蔵であったようで、呼称から推測して乾二重槽ではないかと思われる。

將軍の行事に関連して注目されるのは、寺社参詣、鷹狩り、軍事訓練の臨席などの、將軍の外出に陪従することで、城内や実紀局での通常の業務の簡潔な実務的記録の無味乾燥に比べると、文章も長く、行事を目撃し、あるいは行事に参加した柳北自身の情景描写や感想が記載されて、興味をそそられる。

代々続く侍講の家柄の当主としての日記であるから、こうした公式的な記録が優先されるのは当然であるが、登城がない日は、柳北の私的な生活の記録が記されている。登城の日でも当直を除けば一日城内にいるわけではないので、下城後は、昌平齋の実紀局勤務を別にすれば、柳北の私的時間となる。

柳北の生活のなかで最も重要なのは、儒者の家として代々の家業である私邸における講義である。四日、十四日、二十四日の四日は『詩経』の講義。九日、十九日、二十九日の九日は『春秋左氏伝』の講義。そして十六日は詩会。十九日は歌会である。このほかに幕臣などの子弟を対象にした素読の会もあった。またときには、実紀

局の上司にあたる林大学頭の詩筵にも連なっている。

儒者としての柳北の生活は、多忙を極めていたといつてもよいであろう。講義をするということは、下調べに相当の時間をとられるからである。さらに、訪問客が絶えずあつて、その応接に休むいとまもないほどののだが、柳北という人は生まれつき社交を好む性格で、むしろ来客は歓迎していたようである。邸のなかで月見の宴を催したり、一献傾けながら親友たちと夜の更けるまで談論風発を楽しんでるのがうかがえる。

しかしこれだけだと、柳北は登城以外一步も外に出ないような生活をしているように見えてしまうが、もともと柳北は家にじつとしいられるタイプの人ではなく、しばしば外出を試みている。侍講見習のうち、友人や門弟を伴って隅田川に舟を泛べたり、江戸近郊の名所を訪ねたりして、いわば健全な遊山を楽しんでいるのだが、侍講就任後の安政三年からは花街の遊びが始まり、四年には柳橋へ出遊となる。『硯北日録』の面白いところは、侍講としての素っ気ない勤務記録と、生来の遊び好きが嵩じた出遊の詳細な記事が混在しているところにある。さすがに他見をはばかってか、たとえば馴染みの芸妓の名が「お勝」であれば「勝」の字を分解した「月巻」と記すなどしている。

『柳橋新誌』初編の附録に柳北の親友である柳河春三が証言しているが、柳北が柳橋に落とした金額は二千両に及ぶであろうという。たしかにそれだけの高価な授業料を払わなければ、あのような詳細

にわたる柳橋という花街の生態は描けなかったのかもしれない。それはともかく、柳北の柳橋での遊興は、友人たちと連れだつて通う形から、特定の芸妓を目当てに単独で通う形になり、ついには「喬氏」と記される芸妓のお蝶を身請けして妾にするまでしている。万延元年（一八六〇）の『硯北日録』には、それにいたる状況が明確に記録されている。

遊興に明け暮れる一方で、安政六年（一八五九）頃から文人たちとの交流も活発になってくる。大沼枕山、大槻磐溪、鷺津毅堂、そして将来洋学者仲間として終生の友となる桂川甫周などとの詩会が頻繁に催され、そこには柳橋の選りすぐりの芸妓たちが待るのである。ときには濯水に舟を泛べて花見に興じ、詩の応酬をする。まさに風流韻事の極みである。

將軍侍講の貴公子成島柳北の日記『硯北日録』は、万延元年十二月九日をもって擱筆されている。なぜ、突如中断されてしまったのか、理由は不明である。いづれにしても、安政元年から七年にわたる日記が現存し、影印本によっても読むようになっており、柳北研究にとって第一級の資料であることは言うを俟たない。ときはまさに二度目のペリー来航の年にはじまり、井伊大老暗殺の桜田門外の変の年に終るといふ、激動の時代を背景にしている。この年、柳北二十四歳。幕府瓦解まであと八年を控えて、十八歳より起筆された青春の記録は終わっている。

凡例

一、底本には、成島柳北自筆の『硯北日録』と『投閑日録』の影印を収める、太平書屋刊の『硯北日録―成島柳北日記』（平成九年刊）を用いた。

一、原文は底本通り、句読点・訓点無しの白文の形で翻刻した。なお、底本における訂正は（見せ消ちも含む）は、訂正後の形を本文とした。

一、待遇表現の空格、欠字等は無視した。

一、本文中の割注は（ ）で示した。欄外書入れは白文の末に追加し、注でその旨を指摘した。

一、漢字は原則として通行の字体に改めたが、龍、藝、廿など原本のままとしたものもある。

一、訓読には歴史的仮名遣いを用いた。難読語に加えた振り仮名も同様にした。

一、略注は固有名詞を中心に施し、一般的な語注は省いた。

一、略注は簡便をむねとした。

一、当日の記事について、略注に漏れたもの、例えば柳北の当時の詩集草稿『寒檠小稿』（国立国会図書館所蔵）中の詩が参考になる場合などは、『余説』にそのことを注記した。

※翻刻・訓読・略注の礎稿は次のような分担で各自が作成・発表し、全員で検討して確定した。

揖斐（正月朔日～十七日） 日野（正月十八日～二月廿二日）
山口（二月廿三日～四月朔日） 藤井（四月二日～五月十七日）
三浦（五月十八日～六月十八日） 高橋（六月十九日～七月七日）
蔡（七月八日～閏七月十三日） 松原（閏七月十四日～八月二十一日）
日 結城（八月廿二日～九月九日） 日野（九月十日～十月二日）
山口（十月三日～十一月二日） 三浦（十一月三日～十一月廿九日）
高橋（十二月朔日～十二月晦日）

※解題は高橋昭男、人名索引・全体の調整は山口旬が担当した。

嘉永七年歲次甲寅

安政元年

硯北日録 一

孟春之月元旦起毫

甲寅日録

温歳十八

正月小

○朔日辛丑曇暖余尚在制中闔家不賀但關門松竹如例以内喪故也茲日微邪阿瞽来針入夜雨有微雪

朔日辛丑、曇、暖。余、尚ほ制中に在り。闔家かふか賀せず。但し關門へきもん・松竹、例の如きは内喪の故を以てなり。茲この日微邪なり。阿瞽あこ来り針す。夜に入りて雨、微雪有り。

〔甲寅〕嘉永七年（一八五四）、十二月二十七日に安政に改元。この年一月十二日、父良讓（号を稼堂・筑山）の後を継ぎ、十八歳で奥儒者見習になる。

〔制中〕喪中に同じ。父稼堂は奥儒者だったが、嘉永六年十一月十一日、五十二歳で没した。

《余説》この年、柳北は十八歳。『寒檠小稿』卷一の巻頭には「元旦賦二絶二律」を収める。ちなみに、成島家の屋敷は、下谷練堀小路（現、台東区上野五丁目）にあった。

○二日壬申淡陰余除喪沐浴受賀藤沢順三柏原信次至久保倉主殿倉地次郎太川村清兵衛小南鉉次北角仙次来賀針瞽
来

二日壬申、淡陰。余、除喪して沐浴し、賀を受く。藤沢順三、柏原信次至る。久保倉主殿、倉地次郎、太川村清兵、
小南鉉次、北角仙次来り賀す。針瞽来る。

〔除喪〕喪服を脱ぐ。

○三日癸卯好晴風寒藤沢順青山元吉柏木誠太夫至伊沢兵九来
三日癸卯、好晴、風寒し。藤沢順、青山元吉、柏木誠太夫至る。伊沢兵九来る。

○四日甲辰陰寒微雨天野弥五来賀

四日甲辰、陰寒、微雨。天野弥五来り賀す。

○五日乙巳細雨大南風山田三育水谷亮藏小川佐左秋山敬助来夜与青山子如仲街日野店

五日乙巳、細雨、大いに南風ふく。山田三育、水谷亮藏、小川佐左、秋山敬助来る。夜、青山子と仲街の日野店に如く。

〔仲街の日野店〕池之端仲町（現、台東区上野二丁目）にあつた小間物屋日野屋。日野屋は『江戸名物詩』に歌
われた有名店。

○六日丙午陰雨晨起地震頗大董叔至是夜節文儺如例滝川嘉衛疾渡辺広次代勤

六日丙午、陰雨。晨起す。地震頗る大なり。董叔至る。是の夜、節文の儺、例の如し。滝川嘉衛疾む。渡辺広次代勤す。

〔節文の儺〕〔節分〕の誤記か。節分の豆まき。この年の立春は一月七日。節分の豆まきは通例その前日に行う。

○七日丁未陰寒完戸雄三佐野叔石橋三英至此日坂上玄丈没

七日丁未、陰寒。完戸雄三、佐野叔、石橋三英至る。此の日、坂上玄丈没す。

○八日戊申陰筒井万輔久保倉主殿至茲日以小林栄太奉告余疾愈之事于朝

八日戊申、陰。筒井万輔、久保倉主殿至る。茲の日、小林栄太を以て余が疾愈ゆるの事を朝に告げ奉る。

〔朝〕幕府の役所を指す。

○九日己酉陰雪数点茲日拜年本郷牛込番街溜池西久保築地小川町駿台皆終謁林祭酒午飴小南

九日己酉、陰、雪数点。茲の日、本郷・牛込・番街・溜池・西久保・築地・小川町・駿台に拜年す。皆終へて林祭酒に謁す。午、小南に飴はんす。

〔拜年〕新年の挨拶をする。

〔林祭酒〕大学頭林復斎。

〔飴〕飯と同じ。

○十日庚戌陰是日又拜年近隣及淺草本所浜街新橋午飯狩野訪晴潭居

十日庚戌、陰。是の日、又た近隣及び淺草・本所・浜街・新橋に拜年す。午、狩野に飯し、晴潭の居を訪ふ。

〔狩野〕 浜町狩野家。成島家の親類筋。

〔晴潭〕 舟橋晴潭。字は秋月。成島家の詩会の定連。

○十一日辛亥淡晴晨起如小林氏茲日遠藤但州達大命明日巳牌余可朝宮欣々幸々一家雀躍青山子晴潭来完戸雄小川
佐至和田半次来宿

十一日辛亥、淡晴。晨起して小林氏に如く。茲の日、遠藤但州、大命を達す。明日巳牌、余、宮に朝す可しと。欣々
幸々、一家雀躍す。青山子、晴潭来る。完戸雄、小川佐至る。和田半次来宿す。

〔巳牌〕 午前十時。

○十二日壬子陰辰牌登營先候蘇鉄間坊主矢代久善導余觀諸殿廊金碧煌耀憩掃治部屋巳牌候焼火間久矣午時於外史
部屋閣老列座参政侍座阿部勢州伝命拜両番格奥詰試守父職賜俸三百石新部屋血誓勢州及参政本庄藝州出座而後入
奥謁御取次衆泊方両頭取御膳番奥之番諸局賜午厨退朝与小南鉉如田橋両府謁用人及閣老参政祭酒邸廻勤畢而帰賀
客満堂茲日暮雨霏々寒酷菌痛阿瞽一針聞蛮舶泊豆州海

十二日壬子、陰。辰牌登營す。先づ蘇鉄の間に候す。坊主矢代久善、余を導きて諸殿廊を觀せしむ。金碧煌耀たり。
掃治部屋に憩ふ。巳牌、焼火の間に候すること久し。午時、外史部屋に於いて閣老列座し、参政侍座し、阿部勢州、

命を伝ふ。両番格奥詰試を拜し、父の職を守れと。俸三百石、新部屋を賜はる。血誓す。勢州及び参政本庄藝州出座、而して後に奥に入り、御取次衆・泊方両頭取・御膳番・奥之番諸局に謁す。午厨を賜はりて退朝す。小南鉉と田・橋兩府に如き、用人に謁す。閣老・参政・祭酒邸に及び、廻勤し畢りて帰る。賀客、堂に満つ。茲の日、暮雨霏々として寒酷はなはだし。齒痛む。阿瞽一針す。蛮船、豆州の海に泊すと聞く。

「蘇鉄間」江戸城大広間の奥にある細長い部屋。松の廊下に近く、松の廊下で刃傷にあった吉良上野介が運び込まれた部屋。

「焼火間」江戸城大廊下のつきあたりにある部屋。表右筆部屋に接する。

「外史部屋」右筆部屋。

「両番格奥詰試」「両番」は「両番組」ともいい、江戸幕府の職制で、大番組と書院番組、のちには書院番組と小番組をいう。「奥詰」は、將軍に近侍し殿中に詰める職、「試」は見習い。

「田橋両府」御三卿のうちの田安家と一橋家。

「祭酒邸」林大学頭の屋敷は八重洲河岸にあった。

「蛮船泊豆州海」ペリーの艦隊は前年嘉永六年六月に浦賀に来航し、いったん退去したが再び江戸を目指して来航し、一月十六日には江戸湾内に投錨した(『続徳川実紀』安政元年一月十二日)。

○十三日癸丑風雨微雪夙如小林氏同朝嘗試習諸事午後退出諸御側衆頭取邸廻勤小川町常盤橋外桜田大橋辺畢矣憩狩野晚飢夜帰一針乃眠茲日幸而雨雪頓歇唯陰雲寒甚

十三日癸丑、風雨微雪。夙に小林氏に如き、同じく營に朝す。試みに諸事を習ふ。午後退出し、諸御側衆・頭取邸に廻勤す。小川町、常盤橋、外桜田、大橋辺にて畢る。狩野に憩ひ晩に飡す。夜帰り、一針して乃ち眠る。茲の日、幸にして雨雪頓に歇む。唯だ陰雲のみ。寒甚し。

〔御側衆頭取〕御側衆は江戸幕府の職制。老中の支配に属し、將軍に侍して交代で殿中に宿直した。その人員は五、六人から七、八人で、大身の旗本から任せられ、そのうち三名は御用取次として將軍居室と御用部屋との取次に当たり、権勢が強かった。〔頭取〕というのは、泊方頭取か。

○十四日甲寅淡晴晚雨先如三線溝小笠原邸而登城三日見習今日而畢小南鉉董叔同会厨後廻勤赤坂番街雉橋辺終矣夜歸脚甚疲一針而臥茲日聞蛮舶不見是一大喜事

十四日甲寅、淡晴、晩に雨ふる。先づ三線溝の小笠原邸に如きて登城す。三日の見習、今日にして畢る。小南鉉・董叔と同じく厨後に会して廻勤す。赤坂・番街・雉橋辺にて終る。夜歸る。脚甚だ疲る。一針して臥す。茲の日、蛮舶見えずと聞く。是れ一大喜事なり。

〔三線溝小笠原邸〕〔三線溝〕は三味線堀（台東区鳥越一丁目北部と小島一丁目南部）。切絵図によれば、この近くに屋敷のある小笠原は、小笠原若狭守と小笠原頼母。小笠原若狭守は当時御側衆を勤めていた小笠原信名。訪ねたのはこの屋敷か。

〔厨後〕食後の意か。

〔雉橋〕竹橋御門の北西寄りに雉子橋御門があり、内堀から外堀へ通ずる接点になっている。現在は神田の共立

女子大の前にある。

○十五日乙卯暁雨半雪乘輿登朝茲日百官拝賀余以席順未定不賀午後市谷小日向辺廻謝畢余於輿中腹悶嘔吐困甚而還阿瞽来針茲日諸門及六尺輩祝儀金錢尽投畢夜月朗然聞阿美利加艦来真邪虚邪可患

十五日乙卯、暁に雨ふる。半ばは雪なり。輿に乗り朝に登る。茲の日、百官拝賀す。余、席順の未だ定まらざるを以て、賀せず。午後、市谷・小日向辺、廻謝し畢る。余、輿中に於いて腹悶嘔吐す。困甚しくして還る。阿瞽来り針す。茲の日、諸門及び六尺輩、祝儀の金錢尽く投じ畢る。夜月朗然たり。阿美利加艦の来るを聞く。真か虚か、患ふ可し。〔茲日百官拝賀〕『続徳川実紀』安政元年正月十五日「月次御礼寺社等。賜時服于浦賀表御用者。垂墨利加船平穩之達」とあり、諸寺社の別当や神主のほか林大学頭や儒者松崎満太郎が拝礼しており、本来ならば柳北も拝礼するはずであったか。

「六尺」駕籠かき、賄方、掃除夫など雑役に携わる下男などの総称。

○十六日丙辰新晴矢口謙斎鹿兒立三平野雄三木村熊藏至連日諸家賀簡及贈物輻輳聞大命降市陌夷舶入港人々不可動揺云諸會計終矣瞽来針奴婢祝儀投終月明

十六日丙辰、新たに晴る。矢口謙斎・鹿兒立三・平野雄三・木村熊藏至る。連日、諸家の賀簡及び贈物輻輳す。聞く、大命市陌に降り、夷舶入港するも人々動揺す可からずと云ふと。諸會計終る。瞽来り針す。奴婢の祝儀投じ終る。月明らかなり。

「大命降市陌」幕府の命令が江戸市中に下ったの意。この日、ペリーの率いる艦隊が江戸湾内に投錨した。

○十七日丁巳快晴礫川茗溪深川廻勤畢青山子桜井阿誰及賀客多来鈴木宗休妻来贈數種蜜舸近在港中春来更不聞探梅之話

十七日丁巳、快晴。礫川・茗溪・深川に廻勤し畢る。青山子・桜井阿誰及び賀客多く来る。鈴木宗休の妻来り、數種を贈る。蜜舸近ごろ港中に在り。春来更に探梅の話を聞かず。

〔礫川〕小石川。

〔茗溪〕お茶の水。

○十八日戊午朝霰午霽新直登営申下牌地震茲日訪良斎翁不逢針瞽来蜜説益囂

十八日戊午、朝に霰ふり、午に霽る。新たに直して営ちやくに登る。申の下牌、地震ふ。茲の日、良斎翁を訪ぬるも逢はず。針瞽来る。蜜説益ます囂し。

〔良斎翁〕安積良斎。

○十九日己未淡晴藤沢順島邑孝宮田文来聞夷艦七艘一艘巨艦也云夜雨蕭々平野勝之来話茲夜西刻藤堂侯孫女没出棺家宰拜門

十九日己未、淡晴。藤沢順・島邑孝・宮田文来る。聞く、夷艦七艘、一艘巨艦なりと云ふ。夜雨蕭々たり。平野

勝之来りて話す。茲の夜の酉の刻、藤堂侯の孫女没し、棺を出す。家宰、門に拝す。

〔藤堂侯〕藤堂高猷（とうどう たかゆき、伊勢津藩第十一代藩主）を指すか。藤堂家の菩提寺は寛永寺寒松院。

○廿日庚申暖春雨如煙

廿日庚申、暖、春雨、煙の如し。

○廿一日辛酉好晴烈風青山子至頭取衆達家君去冬皆勤恩賜在明日己牌前（マ）余可代朝營云秋敬助水亮藏至風料峭

廿一日辛酉、好晴、烈風。青山子至る。頭取衆達するに、家君去冬皆勤の恩賜は明日己牌前に在り。余代りて營に朝すべしと云ふ。秋敬助・水亮藏至る。風料峭たり。

○廿二日壬戌晴登營泊方菅沼織部正殿御通詞賜時服一襲蓋家君去冬皆勤之賜也完戸生金子民至觀月庵謁本覺及諸尼

廿二日壬戌、晴。營に登る。泊方の菅沼織部正殿の御通詞にて時服一襲を賜はる。蓋し家君の去冬皆勤の賜なり。完戸生・金子民至る。觀月庵に本覺及び諸尼に謁す。

〔觀月庵〕成島邸内の庵。

○廿三日癸亥晴直日登營茲日暄暖有春意歸途訪良齋不逢至宅而良齋来

廿三日癸亥、晴。直日にて宮に登る。茲の日、暗暖にして春意有り。帰途良斎を訪ぬるも逢はず。宅に至りて良斎来る。

○廿四日甲子暖南風微雨素読稽古始茲日新鑄壹朱銀下市陌余亦觀之

廿四日甲子、暖。南風微雨なり。素読稽古始む。茲の日新たに壹朱銀を鑄して市陌に下す。余も亦た之を觀る。

「壹朱銀」嘉永壹朱銀。『続徳川実紀』安政元年一月廿一日条に「壹朱銀通用令」とある。また、『武江年表』卷九に「正月より一朱銀通用始まる」とある。

○廿五日乙丑淡霽遠浦砲声如雷本法寺拝肅莊公墓帰途大風捲沙且以肅公印章在予懷王父君使家僮邀予帰而調印投城使故急遽困甚針瞽来矢口謙斎至入夜織雨聞砲声則蛮艦所放可驚

廿五日乙丑、淡霽。遠浦の砲声、雷の如し。本法寺にて肅莊公墓を拜す。帰途、大風、沙を捲き、且つ肅公の印章の予が懷に在るを以て、王父君、家僮をして予を邀へしむ。帰りて調印して城使に投ぜんが故なり。急遽、困甚だし。針瞽来る。矢口謙斎至る。夜に入りて織雨ふる。砲声を聞く。則ち蛮艦の放つ所なり。驚くべし。

「遠浦砲声」『続徳川実紀』安政元年一月廿五日条に「異国船中発祝砲」とある。新暦では1854年2月22日に当たり、アメリカ初代大統領、ジョージ・ワシントンの誕生日を祝うためであった。

「本法寺」妙栄山本法寺。日蓮宗。本所横川（現在の墨田区横川一丁目）にある。なお、成島家の墓は現在、雑司ヶ谷霊園にある。

「肅莊公」柳北の父。成島稼堂を指す。

「王父君」祖父。成島司直を指す。養子筑山に先立たれ、孫柳北の後見として晩年を送った。

○廿六日丙寅陰寒狂風小詩発会矢口謙斎岩董斎舟晴潭関雪江岡野鼎来小飲

廿六日丙寅、陰寒、狂風。小詩発会す。矢口謙斎・岩董斎・舟晴潭・関雪江・岡野鼎来り、小飲す。

○廿七日丁卯晴秋敬助山玄活至

廿七日丁卯、晴。秋敬助・山玄活至る。

○廿八日戊辰晴朝営席次未定不賀満城只蛮艦之話耳青山子伊沢兵九至

廿八日戊辰、晴。営に朝するに席次未だ定まらずして賀せず。満城只蛮艦の話のみ。青山子・伊沢兵九至る。

「席次未定不賀」この日は城中にて月並御礼があつたが、柳北には正式な席順が定まっていなかったためであろう。

○廿九日己巳霽聞夷舶入大森港午後與杉忠達小佐左至芝浦観諸塁形勢晚帰

廿九日己巳、霽。夷舶の大森港に入るを聞く。午後、杉忠達・小佐左と芝浦に至り、諸塁の形勢を観る。晚帰る。

「諸塁」江戸湾防衛のために建設された台場。

二月大

○朔日庚午晴如淺草藏宿過平埜氏肅公調書御用俸春分銀五餅今日賜焉
朔日庚午、晴。淺草の藏宿に如き、平埜氏に過る。肅公の調書御用俸、春分銀五餅、今日賜はる。
〔肅公調所御用俸〕父、稼堂の『徳川実紀』編纂御用の俸禄か。

○二日辛未織雨暖杉忠達来午後如佐野杉本二家

二日辛未、織雨、暖。杉忠達来る。午後、佐野・杉本二家に如く。

○三日壬申陰当直雪江至岡野鼎入門小川佐左至青山子来細雨

三日壬申、陰。直に当る。雪江至る。岡野鼎入門す。小川佐左至る。青山子来る。細雨ふる。

○四日癸酉霽風井沢兵九来閱武器連日

四日癸酉、霽、風あり。井沢兵九来る。武器を閲すること連日なり。

○五日甲戌晴和

五日甲戌、晴和。

○六日乙亥曇寒鹿兒三至舟晴潭来

六日乙亥、曇寒。鹿兒三至る。舟晴潭来る。

○七日丙子陰曉今日祭酒等與蛮帥対譚且有饗具未知真虚暮雨濛々

七日丙子、陰。今日、祭酒等の蛮帥と対譚し、且つ饗有るを聴く。具に未だ真虚を知らず。暮雨濛々たり。

「今日、真虚」二月十日に迎接することが誤つて伝わつたか。

○八日丁丑織雨^{つゆ}勉霽当直登營夜左氏発会頗有春色茲日嚴令下為蛮艦也

八日丁丑、織雨、晩に霽る。直に当たりて營に登る。夜、左氏発会す。頗る春色有り。茲の日、嚴令下る。蛮艦の為なり。

「左氏発会」「左氏伝」の新年初めての読書会を開いたこと。

「嚴令」外国船への防備・対処についての命令、防禦備方令を指す。『統徳川実紀』安政元年二月十日条に「亜墨利加渡来ニ付、心得之儀。(後略) 大小筒配方之儀者勿論、劍槍手詰之勝負等、実地之接戦、専一二心掛候様、精々厚可ニ申付候」とある。

○九日戊寅晴風鹿兒来犬塚赤城贈魚尚書発会矢口謙来蒞

九日戊寅、晴、風あり。鹿兒来る。犬塚赤城、魚を贈らる。尚書発会。矢口謙来り蒞^{のぞ}む。

「尚書発会」「尚書」の新年初めての読書会を開いたこと。

〔蒞〕場に至ること。

○十日己卯霽予御證文相濟頭取相達即上宮已未牌也帰如藏宿書換奉行宅達之間蛮船応接今日一濟云夜孟子発会
十日己卯、霽。予、御證文相濟ませ、頭取相達す。即ち宮に上る。己に未牌なり。帰りに藏宿に如きて、書き換え、
奉行宅に之を達す。蛮船の応接、今日一たび濟むを聞くと云ふ。夜、孟子発会す。

〔蛮船応接〕『続徳川実紀』「温恭院殿御実紀」安政元年二月十日条に「於横浜、亜墨利加使節応接」とある。石
津灌園『近事紀略』卷一には「二月十日、遣林大学頭、井戸対馬守、及下田奉行伊沢美作守政義、目付鶴殿民部
少輔長鋭等、于武蔵横浜村仮館接見墨使」とある。

〔孟子発会〕『孟子』の新年初めての読書会を開いたこと。

○十一日庚辰晴肅公忌日掃墓與青山子伴午後青山至

十一日庚辰、晴。肅公の忌日なり。墓を青山子と伴に掃ふ。午後、青山至る。

○十二日辛巳淡霽大和田善太入門青山来詩会岩関二子来

十二日辛巳、淡霽。大和田善太入門す。青山来る。詩会、岩・関二子来る。

○十三日壬午晴風有陰雲当直上宮午後井沢兵九鈴木益婆来夜左会

十三日壬午、晴、風あり。陰雲有り。直に当たりて営に登る。午後、井沢兵九・鈴木益婆来る。夜、左会あり。

○十四日癸未晴尚書会謙斎至中根豊八来湯浅伴衛至託児猪助之事倉商使人告明日借米受取之事

十四日癸未、晴。尚書会あり。謙斎至る。中根豊八来る。湯浅伴衛至る。児猪助の事を託す。倉商、人をして明日借米受取の事を告げしむ。

〔倉商〕成島家の札差を指す。

○十五日甲申雨冷謙斎^{てつ}拜勘定出役是日玉落借米降席順伺相済小林栄達来無孟会

十五日甲申、雨冷たし。謙斎、勘定出役を拜す。是の日、玉落の借米降る。席順の伺ひ相済む。小林栄達来る。孟会無し。

〔玉落〕江戸時代、春・夏・冬の年三回、浅草の蔵前で旗本・御家人に知行米・扶持米を交付する順を決める抽選法。各自の氏名および受け取り高を記した紙片を丸めて箱に入れ、その中から下に落ちた紙片の人から順に交付した。

〔孟会〕『孟子』の読書会。

○十六日乙酉霽暖有事登営午後如倉商家受昨日米金帰会計終夜雨晴潭来

十六日乙酉、霽、暖かし。事有りて営に登る。午後、倉商の家に如き、昨日の米の金を受けて帰る。会計終る。夜、雨ふる。晴潭来る。

○十七日丙戌陰煖井沢至謙斎来告昨日蒙蝦夷之台命本月廿七日出宅也雨微洒
十七日丙戌、陰、煖かし。井沢至る。謙斎来る。昨日、蝦夷^{ウラ}之きの台命を蒙り、本月廿七日、宅を出つると告ぐるなり。
雨微かに洒ぐ。

○十八日丁亥風雨寒甚当直登宮

十八日丁亥、風雨、寒さ甚だし。直に当たりて宮に登る。

○十九日戊子陰微雨鹿兒立至函工持僕甲来夜霰

十九日戊子、陰、微雨。鹿兒立至る。函工、僕の甲を持ち来る。夜霰ふる。

〔函工〕甲冑師。

○廿日己丑好霽登宮初勤御次講青山井沢杉本来予借米手形本多越中殿御印相濟夜京橋辺火休会

廿日己丑、好霽。宮に登りて初めて御次講を勤む。青山・井沢・杉本来る。予の借米手形、本多越中殿の御印相濟む。
夜、京橋辺にて火あり。会を休む。

○廿一日庚寅霽田辺脩完戸生来茲日肅公百箇逮夜供養菓核贈佐杉氏聞蛮艦一艘加

廿一日庚寅、霽。田辺脩・完戸生来る。茲の日、肅公百箇逮夜供養す。菓核を製りて佐・杉氏に贈る。蛮艦一艘

加ふと聞く。

○廿二日辛卯新晴肅公百箇日與青山父子同拜寺墓遊墨陀歸晚飡平岩店

廿二日辛卯、新晴。肅公百箇日、青山父子と同じくして寺墓を拝す。墨陀に遊びて歸る。晩に平岩店にて飡す。

〔墨陀〕隅田川。

〔平岩店〕葛西太郎の名で知られた向島の料理屋。

○廿三日壬辰晴暴暖如四月候大南風当直朝殿筒肥州有書告前霄歸府之事

廿三日壬辰、晴、暴かに暖かし。四月の候の如し。大いに南風ふく。直に当り、殿に朝す。筒肥州、書有り、前霄歸府の事を告ぐ。

〔筒肥州〕筒井肥前守政憲。

〔歸府〕ロシアの使節プチャーチンとの長崎での交渉から歸る（川路聖謨同行）。

○廿四日癸巳陰煖吉村左一始見夜如平野氏鹿兒立至

廿四日癸巳、陰、煖かし。吉村左一、始めて見ゆ。夜、平野氏へ如く。鹿兒立至る。

○廿五日甲午陰雨午霽晴潭来午後左氏会

廿五日甲午、陰、雨ふり、午、霽る。晴潭来る。午後、左氏会。

○廿六日乙未陰微雨赴石井弓場稽古始夜帰

廿六日乙未、陰、微雨。石井弓場に赴き、稽古始む。夜帰る。

○廿七日丙申晴井沢至米商報予借米落

廿七日丙申、晴。井沢至る。米商、予の借米の落るを報ず。

○廿八日丁酉好晴風朝有微雨登營拜賀初謁城中説曰蛮艦交易半決星野禄三来竹本長州有書矢口来辞曰明日如蝦夷借左氏小本去孟会

廿八日丁酉、好晴、風ふく。朝、微雨有り。營に登り、拜賀し、初めて謁す。城中に説きて曰く、「蛮艦の交易、半ば決す」と。星野禄三来る。竹本長州、書有り。矢口来り辞す。曰ふ、「明日、蝦夷に如く」と。左氏小本を借り去る。孟会。

〔蛮艦交易〕三月一日、日米和親条約調印（『続徳川実紀』）。

《余説》『寒檠小稿』二月二日と二月二九日の間に「送矢口直養蒙台命如蝦夷」を収める。

○廿九日戊戌晴風詩会田辺剛及関岡二子来

廿九日戊戌、晴、風ふく。詩会あり。田辺剛及び関・岡二子来る。

《余説》『寒檠小稿』に、詩会の詩「杏村春雨二首 二月廿九日小集」を収める。

○晦日己亥晴鈴木宗休至左会

晦日己亥、晴。鈴木宗休至る。左会。

三月小

○朔日庚子晴如平野杉本二氏無詩経会

朔日庚子、晴。平野・杉本二氏に如く。詩経会、無し。

○二日辛丑晴如長尾佐野二氏青山来武器皆済

二日辛丑、晴。長尾・佐野二氏へ如く。青山来る。武器、皆済む。

○三日壬寅小雨晴風始於大広間拝賀夜小飲

三日壬寅、小雨、晴、風あり。始めて大広間に於いて拝賀す。夜、小飲。

〔拝賀〕『続徳川実紀』三月三日「桃節如規」。

○四日癸卯淡晴柏原信鈴木宗休至広永孝次入塾夜雨松岡肇水谷亮来

四日癸卯、淡晴。柏原信・鈴木宗休至る。広永孝次、入塾す。夜、雨ふる。松岡肇・水谷亮来る。

○五日甲辰晴作予蒙台命内祝賀餅贈諸家狩野叔母君来婢夏辞去青山至夜左会秋月来

五日甲辰、晴。作^はめて予、台命を蒙り、内祝の賀餅、諸家に贈る。狩野叔母君来る。婢夏、辞去す。青山至る。夜、左会。秋月来る。

「狩野叔母君」柳北の父の妹、歌子。狩野董川の妻。

「秋月」舟橋清潭の字。

○六日乙巳陰煖如藏宿伊勢店受借米金来茲日大南風暴煖贈賀餅于諸氏畢

六日乙巳、陰、煖かし。藏宿伊勢店に如く。借米金を受け来る。茲の日、大いに南風あり、暴かに煖かし。賀餅を諸氏に贈り畢りぬ。

「伊勢店」藏宿（札差）、伊勢屋。

○七日丙午霽上营与小林栄談内喪表発之事茲日暴煖甚矣松肇来茲日遠礮数震

七日丙午、霽。营に上る。小林栄と内喪表発の事を談ず。茲の日、暴煖、甚だし。松肇来る。茲の日、遠礮、^{しば}しば震ふ。

「遠礮」礮は砲の正字。遠くの砲声。

○八日丁未風雨当直上宮聞墨船帰帆真邪偽邪

八日丁未、風雨。直に当り、宮に上る。墨船の帰帆を聞く。真か、偽か。

○九日戊申霽閱新製器械董叔井沢青山至夜孟会

九日戊申、霽。新製の器械を閲す。董叔・井沢・青山至る。夜、孟会。

○十日巳酉雨北越人松川成市入門茲日小納戸頭取達肅公明日可上宮云晚来頭痛阿瞽来針

十日巳酉、雨。北越人、松川成市、入門す。茲の日、小納戸頭取、達して、「肅公、明日、宮に上るべし」と云ふ。晚来、頭痛す。阿瞽、来り針す。

○十一日庚戌晴大風朝城為肅公名代也夏目左近将監殿御通詞為難波戦記恩賜々白浮織一反及手附出役書写者五人銀一餅宛掃招出役頭取萩原文左達之桜井賢次来謁一寐熱発一針頗快水亮蔵至茲日肅公忌日託伊沢青山代掃墓

十一日庚戌、晴、大風。城に朝す。肅公名代の為なり。夏目左近将監殿の御通詞、『難波戦記』恩賜の為なり。白浮織一反及び手附・出役・書写者五人、銀一餅宛を賜り帰る。出役頭取萩原文左を招き、之を達す。桜井賢次来り謁す。一寐し、熱発す。一針、頗る快し。水亮蔵至る。茲の日、肅公の忌日、伊沢・青山に託して代て墓を掃

はしむ。

〔難波戦記〕 万年頼方・二階堂行憲著の軍記。大坂の陣の始末を記す。寛文十二年成立か。

〔白浮織〕 しろうきおり。浮織は糸を浮かせて模様を浮き出す織り方。

○十二日辛亥陰細雨数糸疝積鬱陶茲日写内喪表発之事一針早眠

十二日辛亥、陰、細雨数糸。疝積、鬱陶し。茲の日、内喪表発の事を写す。一針、早く眠る。

○十三日壬子陰当直朝営与小林栄談表発之事帰途過林祭酒佐虎来於射場試弓茲日聞蛮船蒸氣入品江巡観可驚嘆矣
二更後董叔提春児酔帰来訪

十三日壬子、陰。直に当り、営に朝す。小林栄と表発の事を談ず。帰途、林祭酒に過る。佐虎、来る。射場に於いて、弓を試む。茲の日、蛮船蒸氣の品江に入りて巡観するを聞く。驚嘆すべし。二更の後、董叔、春児を提て酔帰し来り訪ふ。

〔蛮船蒸氣入品江〕 『続徳川実紀』 三月十三日「……目鏡に而御覧之処。品川御台場先小船乗居候者之着服模様等分明之由。」

〔董叔、春児〕 柳北の叔母の夫狩野董川とその子春川。

○十四日癸丑織雨青山来頭取達明日無拝賀

十四日癸丑、織雨あり。青山来る。頭取、明日、拝賀無きを達す。

○十五日甲寅微雨小山縫衛来写発喪諸書水亮来託小林栄明日判元見届事

十五日甲寅、微雨あり。小山縫衛来る。発喪の諸書を写す。水亮来る。小林栄に明日の判元見届の事を託す。

〔判元見届〕武家の急養子願出があつた場合、幕府から役人を派遣し、出願人の病床に臨ませ、本人の生存を見届け、願書の真偽を聞きたださせること。

○十六日乙卯好霽午前小林栄太来判元相終杉本達青山芳来列伊沢至月明奇寒

十六日乙卯、好霽。午前、小林栄太来り、判元、相終る。杉本達・青山芳来り列す。伊沢至る。月明、奇寒。

○十七日丙申霽秋月子中村建三来是日以小林栄告肅公病死之事於朝及跡目願及諸書達月番松平玄蕃殿余自今日忌制

十七日丙申、霽。秋月子・中村建三来る。是の日、小林栄を以て、肅公病死の事を朝に告げ、及び跡目願及び諸書を月番松平玄蕃殿に達す。余、今日より忌制。

○十八日丁巳晴田辺脩鈴益婆来観月庵小飲

十八日丁巳、晴。田辺脩・鈴益婆来る。観月庵にて小飲。

○十九日戊午晴

十九日戊午、晴。

○廿日己未晴暄掃本法寺墓路看墨陀花盛候也佐藤新九江目芳太来青木銀三水亮藏至

廿日己未、晴、暄かし。本法寺の墓を掃ひ、路に墨陀の花盛りの候を看るなり。佐藤新九・江目芳太来る。青木銀三・水亮藏至る。

《余説》『寒檠小稿』に「季春二十日蚤起赴墨陀看花二首」と題する詩を収める。

○廿一日庚申晴中根豊八来夜秋月至

廿一日庚申、晴。中根豊八来る。夜、秋月至る。

○廿二日辛酉雨青山来与渡生分韻作七首絶夜行青山氏

廿二日辛酉、雨。青山来る。渡生と分韻し、七首の絶を作る。夜、青山氏へ行く。

「渡生」左の詩題に「渡辺生」とあり、渡辺広次か。

《余説》『寒檠小稿』に「暮春雜興与渡辺生分細雨湿衣看不見閑花落地聴無声之句作韻」と題する絶句七首を収める。

○廿三日壬戌濛雨檢衣筐

廿三日壬戌、濛雨。衣筐を検す。

○廿四日癸亥晴伊沢青木来話聞米艦猶未帰帆

廿四日癸亥、晴。伊沢・青木来り話す。米艦、猶ほ未だ帰帆せざるを聞く。

○廿五日甲子霽暄母君癯疾自去冬至今不愈闔家紛雜可厭焉

廿五日甲子、霽、暄かし。母君の癯疾、去冬より今に至り愈えず。闔家、紛雜、厭ふべし。

○廿六日乙丑晴大和田善太至市婢辞去青山至晚来急雨暴暖

廿六日乙丑、晴。大和田善太至る。市婢辞去す。青山至る。晚来、急雨、暴かに暖かし。

〔市婢〕市という名の下女か。

○廿七日丙寅暁天雷轟雨烈晨晴既見夏色午前復雨大雷数震聖堂書生寮番街薬苑鍛冶街処々

廿七日丙寅、暁天、雷轟き雨烈し。晨に晴れ既に夏色を見る。午前、復た雨ふり大雷数しば震ふ。聖堂書生寮、番街薬苑、鍛冶街処々震す。

〔番街薬苑〕番町にあつた幕府の御薬園。

○廿八日丁卯陰又晴大風岡野鼎江目芳来

廿八日丁卯、陰又晴、大風。岡野鼎・江目芳来る。

○廿九日戊辰晴冷倉地次郎八青木銀三至夜与渡生読明紀

廿九日戊辰、晴、冷し。倉地次郎八・青木銀三至る。夜、渡生と『明紀』を読む。

〔明紀〕書名。清、沈鶴撰。明一代を編年体で記した史書。

四月大

○朔日己巳霽素読始風烈与等行尼理衣筐秋月子至夜如杉本氏近日来余鬱陶成胸痛故服坂上玄伸之薬於是一快

朔日己巳、霽。素読始む。風烈し。等行尼と衣筐を理む。秋月子至る。夜、杉本氏に如く。近日来、余、鬱陶し、胸痛を成す。故に坂上玄伸の薬を服す。是に於いて一快す。

○二日庚午晴薄暑津田信助細簡往復有内話之事

二日庚午、晴、薄暑。津田信助、細簡往復す。内話の事有り。

○三日辛未霽風董叔佐久間庄次田邊平三来伊澤来

三日辛未、霽、風あり。董叔、佐久間庄次、田邊平三来る。伊澤来る。

○四日壬申雨午晴青木銀杉本達青山芳至

四日壬申、雨、午晴る。青木銀、杉本達、青山芳至る。

○五日癸酉霽冷高柳隆太来

五日癸酉、霽、冷たし。高柳隆太来る。

○六日甲戌晴風夜暴暖此日京師東風火発禁裏仙洞災

六日甲戌、晴、風あり。夜、暴（はげ）に暖かし。此の日、京師、東風に火発し、禁裏仙洞、災す。

《余説》『続徳川実紀』安政元年四月十日「当月六日。午下刻。御所御築地内より出火有之。禁裏御所仙洞御所。其外宮方御門跡堂上方夥敷御炎上。夫より町方（江）飛火」の記事あり。このため江戸城では翌日惣出仕になった。

○七日乙亥陰南風晚雨

七日乙亥、陰、南風、晚に雨ふる。

○八日丙子雨冷午霽

八日丙子、雨、冷し。午、霽る。

○九日丁丑陰寒北角仙次至武田糸生辞塾去夜遥雷

九日丁丑、陰、寒し。北角仙次至る。武田糸生塾を辞し去る。夜、遥に雷す。

○十日戊寅晴鹿兒来柏原信来秋月至

十日戊寅、晴。鹿兒来る。柏原信来る。秋月至る。

○十一日巳卯霽與青山拜墓鹿兒至頭取達曰禁裏炎上遏音自今日三日云愕々恐々

十一日巳卯、霽。青山と墓を拜す。鹿兒至る。頭取達して曰く。禁裏の炎上、遏音今日より三日と云ふ。愕々恐々たり。

「遏音」遏はとどめる。音曲停止。

《余説》『続徳川実紀』四月十一日「禁裏炎上に付、鳴物今日より明後十三日迄停止之事。但普請者不苦候。」

○十二日庚辰晴鹿兒来伊澤至本阿弥敬至

十二日庚辰、晴。鹿兒来る。伊澤至る。本阿弥敬至る。

○十三日辛巳陰大風使嘉平如本法寺建肅公之碣此日觀月庵供飯完戸雄至
十三日辛巳、陰、大いに風あり。嘉平をして本法寺に如かしむ。肅公の碣を建つ。此日觀月庵にて飯を供す。完戸雄至る。

○十四日壬午陰薄暑名倉久三青木銀來話岡本正太至小藤堂侯贈津緞三卷

十四日壬午、陰、薄暑。名倉久三、青木銀來たり話す。岡本正太至る。小藤堂侯、津緞三卷贈らる。

「緞」もじ。もじり織の麻布。目がすいっているので夏の着物や蚊帳にする。津の特産品。

○十五日癸未陰大和田生來小集入夜晴潭至

十五日癸未、陰。大和田生來る。小集。夜に入り晴潭至る。

○十六日甲申烟雨午晴風夜月食九時二分半

十六日甲申、烟雨、午晴る。風あり。夜、月食九時二分半。

○十七日乙酉晴大和田生來

十七日乙酉、晴。大和田生來る。

○十八日丙戌晴、肅公三十五日之供養、饅餅贈諸氏、数七百五十也。青木、青山、大和田、生至、棊戦、伊坂、生入塾す。
十八日丙戌、晴。肅公三十五日の供養に饅餅を製し諸氏に贈る。数七百五十なり。青木、青山、大和田、生至る。大和田、生至る。棊戦あり。伊坂、生入塾す。

○十九日丁亥、晴。餅七百を製し諸氏に贈る。大和、青木、至る。
十九日丁亥、晴。餅七百を製し諸氏に贈る。大和、青木、至る。

○廿日戊子、霽。餅四百五十を諸家に贈る。及び奴婢に賜り畢ぬ。杉本、董叔、大和、青木、島邑、孝至る。
○廿日戊子、霽。餅四百五十を諸家に贈る。及び奴婢に賜り畢ぬ。杉本、董叔、大和、青木、島邑、孝至る。

○廿一日己丑、晴、暑さ催す。大和、生來る。
○廿一日己丑、晴、暑さ催す。大和、生來る。

○廿二日庚寅、霽。大和、生來る。小納戸、頭取衆、台命、有るを達す。予の喪を免じ、明日朝に直すべしと云ふ。筒井、万輔、秋月、至る。
○廿二日庚寅、霽。大和、生來る。小納戸、頭取衆、台命、有るを達す。予の喪を免じ、明日朝に直すべしと云ふ。筒井、万輔、秋月、至る。

○廿三日辛卯晴午雨暖冷相半此日直上宮諸謝礼尽済帰途如佐野氏悼房兒之喪且告除喪上城大和生来
廿三日辛卯、晴、午に雨ふる。暖冷相半す。此日直にて宮に上る。諸謝礼、尽く済む。帰途、佐野氏に如き、房兒の喪を悼み、且つ喪を除きて城に上ることを告ぐ。大和生来る。

○廿四日壬辰雨午晴青木伊沢来

廿四日壬辰、雨、午に晴る。青木、伊沢来る。

○廿五日癸巳雨與青木大和二生相伴拜肅公墓餼墨陀平岩亭出綾瀬至堀切村帰困而大楽深夜遥雷

廿五日癸巳、雨。青木・大和二生と相伴ひ肅公の墓に拝す。墨陀の平岩亭に餼す。綾瀬に出で、堀切村に至りて帰る。困じて大楽す。深夜遥かに雷す。

〔平岩亭〕葛西太郎の名がある鯉料理の有名店。『江戸買物独案内』に載る。

〔綾瀬、堀切村〕江戸郊外。現、東京都足立区。

○廿六日甲午雨大和生来檢衣筐

廿六日甲午、雨。大和生来る。衣筐を検す。

○廿七日乙未晴狩叔母君杉本和田春孝及青山青木大和田小川佐左多紀楽法印傍島富丞来

廿七日乙未、晴。狩叔母君、杉本、和田春孝及び青山、青木、大和田、小川佐左、多紀樂法印、傍島富丞来る。

○廿八日丙申直上宮拝賀如例與林祭酒談

廿八日丙申、雨。直にて宮に上り拝賀、例の如し。林祭酒と談ず。

○廿九日丁酉晴青大二生来檢幅匣

廿九日丁酉、晴。青・大二生来る。幅匣を檢す。

○晦日戊戌陰微雨大和生来檢衣筐

晦日戊戌、陰、微雨。大和生来る。衣筐を檢す。

五月小

○朔日己亥日食六時二分陰不見雨涔々登宮拝賀如例

朔日己亥。日食六時二分。陰りて見えず。雨、涔々しんしんたり。宮に登る。拝賀例の如し。

○二日庚子雨霽大和生中村健三来井沢至

二日庚子、雨、霽る。大和生、中村健三来る。井沢至る。

○三日辛丑晴直上城如林祭酒及狩野氏

三日辛丑、晴。直にて城に上る。林祭酒及び狩野氏に如く。

○四日壬寅陰秋月来佐野豎中村桂次郎入門青木来掃什器晚霽

四日壬寅、陰。秋月来る。佐野豎・中村桂次郎入門す。青木来りて什器を掃く。晩に霽る。

○五日癸卯晴登營拝賀午驟雨又晴杉本達来如平野氏過青山氏

五日癸卯、晴。營に登り拝賀す。午に驟雨、又晴る。杉本達来る。平野氏に如き青山氏に過る。

○六日甲辰陰冷大青二生来檢什物雨洒

六日甲辰、陰、冷し。大・青二生来る。什物を檢す。雨洒ぐ。

○七日乙巳雨登城有事也午晴

七日乙巳、雨。城に登る。事有ればなり。午に晴る。

○八日丙午晴直營大生至

八日丙午、晴。營に直す。大生至る。

○九日丁未好晴青大生来掃什物詩会

九日丁未、好晴。青・大生来る。什物を掃ふ。詩会。

○十日戊申陰完戸鑑次来謁岡野岡本来草薙吉五至詩会夜如北角氏過伊勢店歸

十日戊申、陰。完戸鑑次来り謁す。岡野、岡本来る。草薙吉五至る。詩会。夜、北角氏に如く。伊勢店に過りて歸る。

○十一日己酉陰晚雨北角来携旧冬借貸来復改請焉大和来小川健至

十一日己酉、陰、晚に雨ふる。北角来る。旧冬の借貸を携へ来り、復た改めて請ふ。大和来る。小川健至る。

○十二日庚戌晴新炎大青生来如伊勢店晚夜大雷一震于深川発災

十二日庚戌、晴、新炎。大・青生来る。伊勢店に如く。晚に雨ふる。夜、大雷、深川に一震し、災を發す。

《余説》この日深川の細川家に落雷があつた。（『武江年表』）

○十三日辛亥晴直營永井佐渡達大命使予為三国画卷辞欣幸晚又雷雨大生至秋月至白雨一過帶狂風来夜深月明大生

宿(処々雨雹或大雷)

十三日辛亥、晴。直に營す。永井佐渡、大命を達し、予をして「三国画卷辞」を為さしむ。欣幸なり。晚又雷雨。大生至る。秋月至る。白雨一過、狂風を帯び来る。夜深て月明らかなり。大生宿す。(処々に雨雹、或は大雷あり。)
「三国画卷辞」この年九月二日の日記に「狩勝川と画を出し三国画卷を省閱す」という記事がある。

○十四日壬子霽大青来詩経発会

十四日壬子、霽。大・青来る。詩経発会。

○十五日癸丑陰登營拝賀大草青三生来天野狂児至

十五日癸丑、陰。營に登り拝賀す。大・草・青三生来る。天野狂児至る。

○十六日甲寅陰佐久間庄至午雨大生至北角十郎兵衛来借金廿円去

十六日甲寅、陰。佐久間庄至る。午に雨ふる。大生至る。北角十郎兵衛来り、金廿円借り去る。

○十七日乙卯好晴青大生来小林栄達明日大君遊品川辺余亦可陪遊頭取田備州口達云

十七日乙卯、好晴。青・大生来る。小林栄、明日大君品川辺に遊ぶ、余も亦た陪遊すべしと達す。頭取田備州の口達と云ふ。

〔頭取田備州〕小納戸頭取太田備中守か。

《余説》『続徳川実紀』五月十八日に「品川筋御成」の記事あり。

○十八日丙辰晴暁天登營與小林南二子陪大君自虎門至品川乘船觀新築一砲台広袤五丁内凹外為堤硝窟屋井尽備美如鬼工埽上陸從東海寺至海晏寺休焉大君乘馬及閣老阿部勢州牧野備州及參政鳥居丹州蓋定陪也本多越州遠藤但州自砲台陪來及内臣同陪乘温等從走至大森大君下歩至習砲場則至和中散賜午飴又乘騎閣參不陪至海晏寺休焉因出平野行里余至名主店小憩遂出目黒至翁茶亭休焉賜団餅串芋因過白銀伊皿子埽城温等辭還家已上灯燼甚一浴臥矣

十八日丙辰、晴。暁天、營に登る。小林・南の二子と大君に陪す。虎門より品川に至り、乗船し、新築の一砲台を觀る。広袤五丁にして、内は凹み、外は堤を為す。硝窟の屋井尽く備はる。実に鬼工の如し。歸るに、上陸し、東海寺より海晏寺に至り休む。大君乘馬し、及び閣老の阿部勢州・牧野備州、及び參政の鳥居丹州（蓋し定陪なり）。本多越州・遠藤但州（砲台より陪し来る）、及び内臣同じく陪乘す。温等は從走し、大森に至る。大君、下歩し、習砲場に至る。則ち和中散に至り、午飴を賜はる。又、騎に乗り（閣參陪せず）、海晏寺に至り休む。因て野に出て行くこと里余、名主店に至り、小憩す。遂に目黒に出て、翁茶亭に至り休む。団餅・串芋を賜はる。因て白銀、伊皿子に過りて、埽城す。温等、辭して家に還る。已に灯を上す。燼れ甚しく、一浴し、臥す。

〔大君〕十三代將軍・徳川家定。

〔新築一砲台〕『寒檠小稿』に「五月十八日陪遊品川 觀新築三砲台」がある。

〔広袤〕袤は、南北の長さ。東西のそれを広という。

〔東海寺〕 目黒川左側に位置する臨濟宗の寺。万松山。

〔海晏寺〕 現在の品川区南品川の南端にあつた曹洞宗の寺。

〔閣老〕 老中。

〔阿部勢州〕 阿部正弘。老中。

〔牧野備州〕 牧野忠雅。老中。

〔参政〕 若年寄。

〔鳥居丹州〕 鳥居忠挙。若年寄。

〔本多越州〕 本多忠徳。若年寄。

〔遠藤但州〕 遠藤胤統。若年寄。

〔和中散〕 大森の梅屋敷。和中散という道中常備薬を商う商家が休み茶屋などを作り賑わつた。

〔翁茶亭〕 目黒の茶屋「爺が茶屋」。

〔白銀〕 現在の港区白金。

〔伊皿子〕 現在の港区高輪。

○十九日丁巳霽上菅謝昨遊之事於内藤宮内午帰青生来伊坂竹丞退塾

十九日丁巳、霽。菅に上る。昨遊の事を内藤宮内に謝す。午、帰る。青生来る。伊坂竹丞、退塾す。

○廿日戊午晴晚雷雨登宮次講至午後青大二生来御目付青木新五兵有書問当嘉定出否之事

廿日戊午、晴、晩に雷雨。宮に登る。次講、午後に至る。青・大二生来る。御目付青木新五兵より書有りて、嘉定に当りて出否の事を問ふ。

〔嘉定〕陰曆六月十六日の除災の行事。

○廿一日己未晴託庭丁支配答昨日御史嘉定之間或陰或雨大生来觀月庵蕎酒供

廿一日己未、晴。庭丁支配に託して、昨日御史の嘉定の間ひに答ふ。或は陰、或は雨。大生来る。觀月庵に、蕎酒を供す。

〔庭丁支配〕御庭番。目配下であつた。

〔御史〕前日の御目付をいう。

○廿二日庚申雨霏々午晴

廿二日庚申、雨霏々、午に晴る。

○廿三日辛酉晴直日上宮有二城御成因之申牌前歸家青生来晚曇

廿三日辛酉、晴。直日、宮に上る。二城御成有り。之に因て、申牌前に家に歸る。青生来る。晚、曇。

○廿四日壬戌雨濛詩經会高玉生入塾

廿四日壬戌、雨濛たり。詩經会。高玉生、入塾す。

○廿五日癸亥雨大生到青山来為杉本借蟲幘

廿五日癸亥、雨。大生到る。青山来る。杉本の為に蟲幘を借す。

○廿六日甲子晴美詩会岩董斎青大生来此日微邪早臥

廿六日甲子、晴、美し。詩会。岩董斎、青大生、来る。此の日、微邪。早臥す。

○廿七日乙丑今暁五更前辰口匠事小屋火朝宮晨婦再登宮問誓詞願之事於御史松本十郎兵一色邦之輔帰宅困臥晴潭
来話水亮蔵至両授肅公遺物小雨

廿七日乙丑。今暁五更前、辰口の匠事小屋に火あり。宮に朝し、晨婦す。再び宮に登り、誓詞願の事を御史松本十郎兵、一色邦之輔に問ふ。帰宅し、困じ臥す。晴潭来り話し、水亮蔵至る。両りに肅公の遺物を授く。小雨。

〔辰口〕江戸城東南東の出口。

〔匠事小屋火〕『続徳川実紀』安政元年五月二十七日「今暁丑刻過、辰の口御普請請定小屋焼亡」

○廿八日丙寅陰直上宮青大来

廿八日丙寅、陰。直にて營に上る。青・大来る。

○廿九日丁卯陰大南風大青至

廿九日丁卯、陰、大いに南風ふく。大・青至る。

六月大

○朔日戊辰好晴上營拝賀如例午後如佐野氏贈遺物青大来

朔日戊辰、好晴。營に上る。拝賀、例の如し。午後、佐野氏に如く。遺物を贈る。青・大来る。

○二日己巳雨霏如杉本青山氏授遺物

二日己巳、雨霏たり。杉本、青山氏に如く。遺物を授く。

○三日庚午霽直上營有台命明後五日四時以前臣可朝營云右参政本庄藝州授御側石河濃州也頭取永井佐州達於予青
大来

三日庚午、霽。直にて營に上る。台命有り。明後五日、四時以前に臣、營に朝すべしと云ふ。右、参政本庄藝州より御側石河濃州に授くるなり。頭取永井佐州より予に達す。青・大来る。

〔明後五日〕この六月五日に、幕府からの家督相続に関する通達が行われた。

〔本庄藝州〕本庄道貫。若年寄。

〔石河濃州〕石河左門貞大。本丸側衆。

〔頭取〕若年寄配下の役職。

〔永井佐州〕永井佐渡守。小納戸頭取。

○四日辛未霽大青伊沢小川佐左来夜大風雨微雷

四日辛未、霽。大・青・伊沢・小川佐左来る。夜、大風雨、微雷。

○五日壬申晴朝菅先啓泊方衆午牌前待蔭土圭久矣内史誘導於土圭間閣老参政列座松平泉州達曰成島桓之助家督無相違不残被下云欣幸々々乃至御用掛泊方両頭取部屋謝賜帰路閣老祭酒御側衆頭取郭内小川町廻勤晩帰賀客来飲予亦一浴一針小飲而臥

五日壬申、晴。菅に朝す。先づ泊方衆に啓す。午牌前、蔭を土圭に待つこと久し。内史、土圭間より誘導す。閣老・参政列座す。松平泉州達して曰はく、成島桓之助の家督、相違無く残らず下さると云ふ。欣幸々々。乃ち御用掛・泊方両頭取の部屋に至り、賜を謝す。帰路、閣老、祭酒、御側衆、頭取、郭内、小川町に廻勤す。晩、帰る。賀客来り、飲む。予も亦た一浴一針、小飲して臥す。

〔蔭〕父祖のおかげで特別の官を得ること。

〔内史〕書記役の奥坊主か。

〔土圭間〕江戸城本丸表の御用部屋の北に当たり、時計が置かれ時刻報知のために奥坊主が詰めていた部屋。

〔松平泉州〕松平乗全。老中。

○六日癸酉雨洒外桜田永田馬場赤坂番街市谷礫川茗溪三線溝廻勤畢矣石橋英青生到夜熱甚奴婢祝賜畢矣

六日癸酉、雨洒ぐ。外桜田、永田馬場、赤坂、番街、市谷、礫川、茗溪、三線溝に廻勤し畢る。石橋英、青生到る。夜熱甚し。奴婢に祝賜し畢る。

〔礫川〕小石川。

〔茗溪〕お茶の水。

〔三線溝〕三味線堀（現在の台東区鳥越一丁目北部と小島一丁目南部）。

○七日甲戌陰熱佐藤立軒中根豊八到狩董叔春兒来午後深川浜街廻勤過佐狩野二氏帰

七日甲戌、陰、熱し。佐藤立軒、中根豊八到る。狩董叔、春兒来る。午後、深川、浜街に廻勤す。佐・狩野二氏に過りて帰る。

○八日乙亥陰直上宮謁林祭酒細雨数点青生到

八日乙亥、陰。直にて宮に上る。林祭酒に謁す。細雨、数点。青生到る。

○九日丙子陰青大生来左氏発会

九日丙子、陰。青・大生来る。左氏発会。

『左氏発会』毎月九の日の『左氏伝』の会を始めたこと。

○十日丁丑晴午後小雨青生到始曝書

十日丁丑、晴、午後、小雨。青生到る。曝書を始む。

○十一日戊寅晴筒井万輔来与青生拜肅公墓晚遊墨陀飲平岩店夜帰一快○綱目開業

十一日戊寅、晴。筒井万輔来る。青生と肅公の墓を拜す。晚に墨陀に遊び、平岩店に飲む。夜、帰る。一快。○『綱目』開業す。

『平岩店』通称葛西太郎。鯉料理で知られる向島の料理屋。

『綱目』『資治通鑑綱目』中国の歴史書。朱熹撰。

○十二日己卯淡晴細井安次伊沢青木至

十二日己卯、淡晴。細井安次、伊沢、青木至る。

○十三日庚辰好晴午熱始酷直朝營帰途過山田氏贈遺物青生到飯田咸三至夜風月晴朗

十三日庚辰、好晴。午熱、始めて酷なり。直にて営に朝す。帰途、山田氏に過りて遺物を贈る。青生到る。飯田咸三至る。夜風、月晴朗。

○十四日辛巳晴青大生来月明詩経会如例是日京師大坂江州勢州等大地震連日不止

十四日辛巳、晴。青・大生来る。月明らかなり。詩経会、例の如し。是の日、京師、大坂、江州、勢州等、大いに地震ひて、連日止まず。

〔大地震〕『続徳川実紀』安政元年六月十五日「此日上方筋地震」。

○十五日壬午晴青生来

十五日壬午、晴。青生来る。

○十六日癸未晴嘉定佳儀上營於大広間御菓頂戴拝領御熨斗午熱如燬二生来晴潭至淡月

十六日癸未、晴。嘉定の佳儀にて営に上る。大広間に於いて御菓を頂戴す。御熨斗を拝領す。午熱、燬くが如し。二生来る。晴潭至る。淡月。

○十七日甲申淡晴田村宗達松岡肇来午後雨又風二生来

十七日甲申、淡晴。田村宗達、松岡肇来る。午後、雨、又風。二生来る。

○十八日乙酉風雨直上宮聞夷艦入下田港不知何船云完戸生到岩董齋来午晴有雲夜訪津田信助舟橋晴潭不逢過狩楚氏歸

十八日乙酉、風雨。直にして宮に上る。夷艦の下田港に入るを聞く。何れの船かを知らずと云ふ。完戸生到る。岩董齋来る。午、晴れ、雲有り。夜、津田信助、舟橋晴潭を訪ふも逢はず。狩楚氏に過りて歸る。

○十九日丙戌霽大青生来名倉久三到詩経会夜如津田信宅要話過秋月家三更歸

十九日丙戌、霽。大・青生来る。名倉久三到る。詩経会。夜、津田信宅に如き、要話す。秋月家に過り、三更に歸る。

○廿日丁亥陰或雨青大生晴潭至小集小飲到四更

廿日丁亥、陰、或は雨。青・大生、晴潭至る。小集す。小飲し、四更に到る。

○廿一日戊子淡霽青大生鹿兒立至夜雷伊沢至

廿一日戊子、淡霽。青・大生、鹿兒立至る。夜雷あり。伊沢至る。

○廿二日己丑陰董齋大青生至完戸生来

廿二日己丑、陰。董齋、大・青生至る。完戸生来る。

○廿三日庚寅小雨直営大生来

廿三日庚寅、小雨。営に直す。大生来る。

○廿四日辛卯陰小雨青大生来詩経会

廿四日辛卯、陰。小雨。青・大生来る。詩経会。

○廿五日壬辰晴青木生来伊沢至収甲冑于庫

廿五日壬辰、晴。青木生来る。伊沢至る。甲冑を庫に収む。

○廿六日癸巳霽上営与小林栄同掃乾府御画番坊主一人小細工二人従焉頭取達明日大川筋御遊有之予亦可陪云帰路
雉橋竹橋及田橋両邸暑候拜訪畢過佐野杉本及近街帰青大生来

廿六日癸巳、霽。営に上る。小林栄と同じく乾府を掃ふ。御画番坊主一人、小細工二人従ふ。頭取達して、明日大川筋の御遊これ有り、予も亦た陪すべしと云ふ。帰路雉橋、竹橋及び田橋の両邸へ暑候に拜訪し畢ぬ。佐野、杉本及び近街に過り、帰る。青・大生来る。

〔乾府〕府は文書や財宝などをしまっておく蔵。乾門の二重櫓のことか。

〔御画番坊主〕書画骨董を管理する坊主か。

〔小細工〕小細工奉行。定員二人。役料各七人扶持。作事奉行に属し、小細工方を支配して城内、御殿の戸障子、

襖以下こまごました細工物製作・修理にあたる。

〔田橋〕 田安家と一橋家

〔暑候〕 暑さ伺い。暑中見舞い。

○廿七日甲午陰涼或雨或晴曉起卯牌後登宮与小林南陪御遊先到竹橋空邸看大礮數十次觀米夷所獻蒸氣車製造巧奇有湯筒（長数尺）及薪竈（如常之浴盤所用方面徑二尺許）其余烟所發氣所洩湯所熱湧有鈴有管（鈴鳴以看湯之熱否）車（朱輪皆鐵）大四小四余物皆金丹碧黃飾之別有輿皆晶障內有数人可踞錦榻及葺奇麗不可尽言矣輿及湯火之車共長七尺許幅三尺許輿車相離行時輿車相繫車引輿行或前行或後卻如意又有異臭襲鼻閉其蒸氣則軸鳴輪怒則奔勢如走雷江川太郎左衛門踞薪竈前開閉之侍臣侍医試受命騎之車所過円々画地以鐵被木作之人不乘之而自奔勢不可留矣奇器雖然亦可称玩物耳次觀本邦所謂水鉄砲所推如常然其筒以皮革作長数丈蜿蜒如蛇從筒頭吐水人持之或北或南上下前後如意蓋軍中消火之器也次觀雷電伝信機（知雷鳴具）及蘭器数種御觀畢而自一石橋上御船予亦上永寿丸到永代橋上陸到深川永代寺蓋富岡祠也午飢終憩久是日也風生雨洒日淡寒忘炎蒸到洲寄天女祠休乎觀海啜茶亦自永代上船到両国船藏前徒士水泳上覽或水中挽弓中的或劍或柔甲冑而涉潛没亦出奪玉攘杖奇々怪々御觀畢米夷所獻之拔貞羅船二艘一赭色一黒碧紅三色長丈余一楫六一楫八楫跳水出如蜻蛉之形矣歸途自二国橋边上陸從大手還御予亦自営中歸時晚涼青大生来

廿七日甲午、陰涼、或は雨、或は晴。曉に起く。卯牌後、営に登る。小林・南と御遊に陪す。先ず竹橋の空邸に到り、大礮数十を看る。次に米夷の獻する所の蒸氣車を觀る。製造巧奇なり。湯筒（長さ数尺）及び薪竈（常の浴盤に

用ゐる所の如く、方にして径二尺許り有り。其の余は煙の発する所、氣の洩る所、湯の熱湧する所、鈴有り、管有り（鈴鳴りて、以て湯の熱するか否かを看る）。車（朱輪にして皆鉄なり）大なるもの四、小なるもの四あり。余の物は皆、金・丹・碧・黄にて之を飾る。別に輿有り。皆晶障内に数人の踞すべき錦榻及び蓐有り。奇麗なることを言を尽すべからず。輿及び湯火の車、共に長さ七尺許り、幅三尺許りなり。輿車相離れ、行く時は輿車相繫ぐ。車は輿を引きて行くなり。或は前に行き、或は後に卻くこと、意の如し。又異臭の鼻を襲ふ有り。其の蒸氣を閉づれば、則ち軸鳴り輪怒る。則ち奔勢走雷の如し。江川太郎左衛門、薪竈の前に踞し、之を開閉す。侍臣・侍医、試みに命を受け之に騎す。車の過る所、円々地を画し、鉄を以て木を被ひて之を作る。人々に乗らずして、自ら奔り、勢い留むべからず。実に奇器なり。然りと雖も亦た玩物と称すべきのみ。次に本邦に謂ふ所の水鉄砲を觀る。推す所は常の如し。然るに其の筒は皮革を以て長さ数丈に作る。蜿蜒として蛇の如し。筒頭より水を吐く。人之を持し、或は北に或は南に、上下前後意の如し。蓋し軍中消火の器なり。次に雷電伝信機（雷鳴を知るの具）、及び蘭器數種を觀る。御觀畢りて一石橋より御船上らる。予も亦た永寿丸に上り、永代橋に到る。上陸し深川永代寺に到る。蓋し富岡祠なり。午疎終り、憩ふこと久し。是の日、風生じ雨洒ぎ日淡く、実に炎蒸を忘る。洲崎天女祠に到りて休む。海を觀、茶を啜り、亦た永代より船上り、兩國船藏前に到る。徒士の水泳、上覽あり。或は水中に弓を挽きの中つ。或は劍、或は柔甲冑にて涉り、潜没しては亦た出る。玉を奪ひ、杖を攘ふ。奇々怪々なり。御觀畢んぬ。米夷献ずる所の抜貞羅船二艘、一は赭色、一は黒碧紅の三色なり。長さ一丈余。一は楫六、一は楫八。楫の水を跳ねて出ること蜻蛉の形の如し。帰途、二国橋辺より上陸し、大手より還御す。予も亦た營中より歸る。時に晚涼。青・大生来る。

〔陪御遊〕「廿七日 深川筋御成。一 今五時過之御供揃ニ而。深川筋_江被為 成。」(『統徳川実紀』)

〔竹橋〕近くに炮筒御藏があつた。嘉永七年五月八日付、江川太郎左衛門の老中阿部正弘宛伺書。「竹橋御藏ニおゐて蒸氣車組立火入相試候様仕度」。

〔米夷所献蒸氣車〕嘉永七年ペリー艦隊は、将軍に大量の献上品をもたらした。

〔浴盤〕たらい。

〔輿〕客車。

〔晶障〕ガラス戸。

〔錦榻〕錦の布張りの座席。

〔蓐〕敷物。

〔円々地を画し、鉄を以て木を被ひて之を作る〕周囲六十間の円周上に枕木を並べ、レールを敷いた。

〔水鉄砲〕消火ポンプ。龍吐水。

〔御船〕御座船。将軍や大名が乗る豪華な船。海御座船と川御座船があつた。

〔一石橋〕外堀と日本橋川の分岐点に架かる橋で呉服橋のあたり。隅田川に出ると永代橋。

〔永代寺〕深川富岡八幡宮の別当寺。

〔富岡祠〕富岡八幡宮。

〔洲崎天女祠〕洲崎弁天社のこと。十万坪とよばれた海浜の景勝地で、近くに料亭などがある。東西線木場駅の南側のあたり。

〔両国船蔵〕隅田川の左岸、新大橋近くにあつた幕府の御舟蔵。十四棟が建ち並び、最大の安宅丸など大小の船が繫留されていた。

〔抜貞蘿船〕バッテリー。バッテリー。洋式船搭載の端艇。はしけ。

○廿八日乙未晴風直上宮今日与小林氏同作乾府曝書御実記十九箱畢松平大膳亮見廻晚帰青大生来

廿八日乙未、晴、風あり。直にて宮に上る。今日小林氏と共に乾府の曝書を作す。御実記十九箱畢りぬ。松平大膳亮見廻る。晩に帰る。青・大生来る。

〔御実記〕『徳川実紀』。

○廿九日丙申晴或風或雨暑^(ママ)候廻勤晨出晚帰小川町番街赤坂永田場^(ママ)々桜田郭内及新橋三線橋畢青大生来

廿九日丙申、晴、或は風、或は雨。暑候の廻勤す。晨に出で、晩に帰る。小川町、番町、赤坂、永田馬場、桜田郭内及び新橋、三線橋にて畢る。青・大生来る。

○晦日丁酉好晴登宮曝書如例山名岐州見廻晚来津田信助舟橋微至有内話青生来狩野叔母君産女兒茲日以御膳番賜瓜二

晦日丁酉、好晴。宮に登る。曝書例の如し。山名岐州見廻る。晚来、津田信助、舟橋微至る。内話有り。青生来る。狩野叔母君、女兒を産む。茲の日、御膳番を以て瓜二つを賜る。

〔山名岐州〕山名壹岐守鎌吉。御小姓頭取介。

七月大

○朔戊戌小雨上宮拝賀如例天曇曝書無之午後深川浜街暑訪終如狩野氏晚餐雨滂沱晚歸茲日柏木誠太杉本達大生来朔戊戌、小雨。宮に上り、拝賀すること例の如し。天曇り、曝書これ無し。午後深川、浜街に暑訪終る。狩野氏へ如き、晚餐す。雨滂沱たり。晚に歸る。茲の日、柏木誠太、杉本達、大生来る。

○二日己亥晴上宮曝書如例青大生晴潭来青山来

二日己亥、晴。宮に上る。曝書例の如し。青・大生、晴潭来る。青山来る。

○三日庚子雷雨直登宮無曝書青生来微邪完戸生来話

三日庚子、雷雨。直にて宮に登る。曝書無し。青生来る。微邪。完戸生来り話す。

○四日辛丑陰晴青大生来始得休憩柏原信来

四日辛丑、陰、晴。青・大生来る。始めて休憩を得たり。柏原信来る。

○五日壬寅晴上宮曝書従今日一人勤之青生来
五日壬寅、晴。宮に上る。曝書、今日より一人にて之を勤む。青生来る。

○六日癸卯晴曙起明神下本郷礫川市谷茗溪暑候廻勤畢過長尾氏謁全叔檢書函遠雷

六日癸卯、晴。曙に起く。明神下、本郷、礫川、市谷、茗溪に暑候の廻勤し畢る。長尾氏に過り、全叔に謁す。書函を檢す。遠雷あり。

○七日甲辰小雨曙材木街火七夕拝賀上宮佐野虎五岩松董斎至

七日甲辰、小雨。曙、材木町に火あり。七夕拝賀にて宮に上る。佐野虎五、岩松董斎至る。

○八日乙巳晴直上宮曝書如例青生大生来菅生帰故郷

八日乙巳、晴。直にて宮に上る。曝書、例の如し。青生・大生来る。菅生故郷に帰る。

○九日丙午陰如伊勢屋請取廿円金来青生来為諸會計大生来

九日丙午、陰。伊勢屋に如く。廿円金請取り来る。青生来りて諸會計を為す。大生来る。

○十日丁未晴上宮曝書不在中林祭酒至大生到

十日丁未、晴。営に上る。曝書。不在中、林祭酒至る。大生到る。

○十一日戊申陰上営曝書如例青生大生来不值。

十一日戊申、陰。営に上る。曝書例の如し。青生・大生来るも値はず。

○十二日己酉晴青生井沢小川佐左来檢書筐夜如津田氏不逢雨洒

十二日己酉、晴。青生、井沢、小川佐左来る。書筐を檢す。夜、津田氏に如くも逢はず。雨洒ぐ。

○十三日甲戌陰直日登営曝書益中休大生来賜奴婢賞西村左兵来

十三日甲戌、陰。直日にて営に登る。曝書、益中休む。大生来る。奴婢に賞を賜ふ。西村左兵来る。

○十四日辛亥雨冷中村鍬来諸會計終辻龍助来青木来夜訪船橋津田両氏

十四日辛亥、雨、冷。中村鍬来る。諸會計終る。辻龍助来る。青木来る。夜、船橋・津田両氏を訪ふ。

○十五日壬子淡晴大生完戸生天野弥五来檢書筐夕雨

十五日壬子、淡晴。大生、完戸生、天野弥五来る。書筐を檢す。夕、雨ふる。

○十六日癸丑雨檢書函

十六日癸丑、雨。書函を検す。

○十七日甲寅晴又陰青山青木大和來檢書函青生宿夜雨

十七日甲寅、晴又陰。青山、青木、大和來る。書函を検す。青生宿す。夜、雨ふる。

○十八日乙卯雨直上宮曝書無之大生來秋月來話

十八日乙卯、雨。直にて宮に上る。曝書これ無し。大生來る。秋月來り話す。

○十九日丙辰雨晴夜如杉本氏

十九日丙辰、雨、晴。夜、杉本氏に如く。

○廿日丁巳晴酷熱如燒上宮曝書如例因御法事賜菓

廿日丁巳、晴、酷熱、燒くが如し。宮に上る。曝書例の如し。御法事に因りて、菓を賜る。

《余説》『続徳川実紀』「廿日御法会結願御名代。貞惇院殿御法会御名代。」

○廿一日戊午陰或雨曝書上宮大生到

廿一日戊午、陰、或ひは雨。曝書。營に上る。大生到る。

○廿二日己未晴青生来午後上營与小林栄同拝詣三縁山慎徳公靈宮蓋公一周御忌也諸侯大夫群参是日大熱如焦完生来

廿二日己未、晴。青生来る。午後、營に上る。小林栄と同じく三縁山の慎徳公靈宮に参拝す。蓋し公の一周御忌なり。諸侯・大夫群参す。この日、大熱、焦がすが如し。完生来る。

〔三縁山〕増上寺の山号。三縁山広度院増上寺。現、東京都港区芝公園四丁目にある浄土宗の寺院。徳川家の菩提寺。

〔慎徳公〕十二代将軍家慶、慎徳院と諡す。

《余説》『続徳川実紀』「廿二日御法会済御参詣。賜御施物于増上寺方丈。」「今五時之御供揃而。増上寺慎徳院様御霊前御廟所江御参詣。」

○廿三日庚申陰直日上營無曝書賜冰蒨一函府中瓜五顆大生青元吉到晩雨霏霏夜詩会大生宿焉

廿三日庚申、陰。直日にて、營に上る。曝書無し。冰蒨一函、府中瓜五顆を賜る。大生、青元吉到る。晩に雨霏霏たり。夜、詩会。大生宿す。

〔冰蒨〕こおりごんじやぐ氷蒨蒨。

〔府中瓜〕府中には幕府の御用瓜を栽培する御瓜田があり、毎年ここから瓜が幕府に献上された。

○廿四日辛酉晴涼炎相半檢書筐青生伊沢来

廿四日辛酉、晴、涼炎相半ばす。書筐を検す。青生、伊沢来る。

○廿五日壬戌晴上宮曝書如例大生青元吉来

廿五日壬戌、晴。宮に上る。曝書例の如し。大生、青元吉来る。

○廿六日癸亥霧晴熱酷檢書函鹿兒至長話夜陰欲雨乱電遙雷頓生狂風成晴

廿六日癸亥、霧、晴、熱酷だし。書函を検す。鹿兒至り長話す。夜、陰、雨ならんと欲す。乱電遙雷、頓に狂風を生じ、晴に成る。

○廿七日甲子晴炎烈青生名倉久三来檢書函

廿七日甲子、晴、炎烈し。青生、名倉久三来る。書函を検す。

○廿八日乙丑晴大熱上宮曝書前拝賀如例夜蒸不寐也茲日蓋直日也

廿八日乙丑、晴、大いに熱し。宮に上る。曝書の前、拝賀例の如し。夜蒸して、寐ざるなり。茲の日、蓋し直日なり。

○廿九日丙寅晴檢書函大青来夜来有風

廿九日丙寅、晴。書函を検す。大・青来る。夜来、風有り。

○晦日丁卯霽登宮曝書如例与小林同力溽熱勞極腹痛大生来

晦日丁卯、霽。宮に登る。曝書、例の如し。小林と同じく力む。溽熱、勞極まる。腹痛。大生来る。

閏七月小

○朔戊辰晴登宮拝賀曝書弓馬故実勞甚小林榮亦共焉自今日出献之間而拝味御料理有膳番岡邑氏之達也

朔戊辰、晴。宮に登る。拝賀、曝書。弓馬の故実、勞甚だし。小林榮も亦た共にす。今日より、出献の間にて、御料理拝味す、膳番岡邑氏の達有ればなり。

〔出献之間〕江戸城本丸にある上献之間。

○二日己巳霽青生来晚雲醸雨遙雷又晴二更雨一過

二日己巳、霽。青生来る。晚雲、雨を醸す。遙に雷し、又晴る。二更、雨一過す。

○三日庚午陰直上宮曝書午時雨来即収曝書帰宅申牌前也晚又晴

三日庚午、陰。直にて宮に上る。曝書。午時、雨来り、即ち曝書を収む。帰宅、申牌の前なり。晚に又晴る。

○四日辛未陰又晴詩經会自今日始青大伊沢至

四日辛未、陰又晴。詩經会、今日より始む。青・大・伊沢至る。

○五日壬申曇登營曝書如例大生来

五日壬申、曇。營に登る。曝書、例の如し。大生来る。

○六日癸酉雨点或晴大生来祖父君如林氏夜淺草門跡火

六日癸酉、雨点じ、或は晴る。大生来る。祖父君、林氏に如く。夜、淺草門跡に火あり。

〔淺草門跡〕淺草の浄土真宗東本願寺派本山東本願寺。

○七日甲戌雨風登營出泊方御部屋賀水府線姫君御安産服染帷子麻上下（蓋女君御誕生実五日也）曝書無焉大生来小
詩会大生宿

七日甲戌、雨、風。營に登る。泊方御部屋に出で、水府線姫君の御安産を賀す。染帷子と麻上下を服す。（蓋し女君御誕生、実五日なり。）曝書無し。大生来る。小詩会。大生宿す。

〔水府〕水戸藩

〔水府線姫君御安産〕『続徳川実紀』安政元年閏七月五日に「線姫君安産ニ付明六日四時、溜詰、酒井修理大夫……布衣以上御役人登城、御祝儀可申上候。尤染帷子、麻上下可為着用候。」の記事を収める。

○八日乙亥風雨直営無曝書青木完戸到

八日乙亥、風、雨。営に直す。曝書無し。青木、完戸到る。

○九日丙子雨晚涼頓生青生来左氏会小川佐左至

九日丙子、雨。晚涼頓に生ず。青生来る。左氏会。小川佐左至る。

○十日丁丑雨大生到檢書箱青山兎来

十日丁丑、雨。大生到る。書箱を檢す。青山兎来る。

○十一日戊寅雨大青鹿兎至使渡生拝掃肅公墳晚霽

十一日戊寅、雨。大・青・鹿兎至る。渡生をして肅公の墳を拝掃せしむ。晩に霽る。

○十二日己卯朝霧新霽登営曝書無之(蓋吹上苑御成有之故也)青大生来田榿齋来伊沢到月明

十二日己卯、朝霧、新たに霽る。営に登る。曝書これ無し。(蓋し吹上苑に御成りこれ有るが故なり。)青・大生来る。田榿齋来る。伊沢到る。月明らかなり。

「吹上苑」半蔵門を入り道灌壕との間にある広大な庭。現在の吹上御苑。

○十三日庚辰霽上宮曝書及整亂籍勞甚林采亦与焉大生到北越尾崎謙之兄来謁

十三日庚辰、霽。宮に上る。曝書及び乱籍を整ふ。勞甚だし。林采も亦た与る。大生到る。北越の尾崎謙の兄来り謁す。

○十四日辛巳晴大生青生伊生岡生来詩経会日暮携伊青二生拝肅公墓看墨陀月帰亦一奇観矣遂飲于家

十四日辛巳、晴。大生・青生・伊生・岡生来る。詩経会。日暮、伊・青二生を携へ、肅公の墓に拝し、墨陀の月を見て帰る。亦た一奇観なり。遂に家に飲む。

○十五日壬午晴登宮拝賀如例与小林采同檢乾府書籍定位茲日以水府姫君御誕之祝賜酒羹晚帰大生到

十五日壬午、晴。宮に登る。拝賀例の如し。小林采と共に乾府の書籍を検し、位置を定む。茲の日、水府姫君御誕の祝いを以て酒羹を賜ふ。晚に帰る。大生到る。

「水府姫君御誕」『続徳川実紀』安政元年閏七月十五日「線姫君様御安産。御七夜之為御祝儀。」

○十六日癸未晴風登宮与小林采掃乾府曝書尽終午時中暑乘輜而帰青生来

十六日癸未、晴、風。宮に登る。小林采と乾府を掃ひ、曝書尽く終る。午時、暑に中り、輜に乗て帰る。青生来る。
《余説》『寛繁小稿』に「閏七月望夜月色清瑩有感賦五十韻」を収める。詩句に「乾府曝書罷」がある。

○十七日甲申晴茲日大君始拝楓山閣宮青生来午前如石井敬丞家聞今暁大暴雨一過小野梧蔭携菓至入夜風雨雷電

十七日甲申、晴。茲の日、大君始めて楓山閤宮を拝す。青生来る。午前、石井敬丞の家に如き、今暁、大暴雨一過と聞く。小野梧蔭、菓を携へ至る。夜に入り、風雨雷電あり。

〔大君〕第十三代將軍徳川家定。

〔楓山閤宮〕楓山は紅葉山。閤宮は靈廟のこと。紅葉山には歴代將軍の廟がある。

《余説》『続徳川実紀』安政元年閏七月十七日に「御代替初而。今五時之御供揃二而。紅葉山御宮_江御参詣。」の記事を収める。

○十八日乙酉陰直営雪江生来諛言可厭晚雨一過晴潭来

十八日乙酉、陰。営に直す。雪江生来る。諛言、厭ふべし。晚、雨一過。晴潭来る。

○十九日丙戌陰時雨青大生来左氏会前田善助到（通鑑目孝景紀始起業）

十九日丙戌、陰、時に雨。青・大生来る。左氏会。前田善助到る。（『通鑑目』孝景紀、始めて業を起す。）

《余説》（通鑑目く起業）の部分は原本では抹消されているが参考の為に本文に加えた。

○廿日丁亥陰青生来檢書函伊坂竹生来謁伊沢生来

廿日丁亥、陰。青生来る。書函を檢す。伊坂竹生来り謁す。伊沢生来る。

○廿一日戊子陰雨伊沢来

廿一日戊子、陰雨。伊沢来る。

○廿二日己丑晴完生来裁成長篇

廿二日己丑、晴。完生来る。長篇を裁成す。

〔長篇〕「寒檠小稿」に収める「閏七月望夜月色清瑩有感賦五十韻」詩を指すか。

○廿三日庚寅晴直日林栄来誘觀山王祭於吹上麗妍極矣

廿三日庚寅、晴。直日。林栄来りて、山王祭を吹上に觀るを誘ふ。麗妍極まれり。

〔吹上〕江戸城の北西にある吹上の御庭。現在の吹上御苑。

〔山王祭〕六月十五日に行われる山王権現の祭礼。神田明神の祭礼である神田祭と隔年で行われる。山王祭の日は、將軍も吹上御苑の上覽所に棧敷を構え、見物する。そのため神輿は江戸城の中まで入る。

○廿四日辛卯陰冷詩經会青大来福田所左到

廿四日辛卯、陰、冷し。詩經会あり。青・大来る。福田所左到る。

○廿五日壬辰陰驟寒尾崎積善至寄其弟謙之書

廿五日壬辰、陰、驟かに寒し。尾崎積善至り、其の弟謙の書を寄す。

○廿六日癸巳晴董叔春兒来誘王父君遊王子午後小集雪江晴潭董斎梧蔭大青伊生来

廿六日癸巳、晴。董叔・春兒来る。王父君を誘ひ、王子に遊ぶ。午後小集。雪江・晴潭・董斎・梧蔭・大・青・伊生来る。

○廿七日甲午晴残炎復生本覚老来於観月菴清話

廿七日甲午、晴、残炎復た生ず。本覚老、観月菴に來り、清話す。

○廿八日乙未南風送雨直登營賜雲雀五隻茲日残熱如燬

廿八日乙未、南風、雨を送る。直にて營に登る。雲雀五隻を賜る。茲の日、残熱、燬くが如し。

「賜雲雀五隻」『統徳川実紀』安政元年閏七月二十八日に「御鷹雲雀賜于老中」の記事を収める。「御鷹之雲雀」は將軍の鷹狩で捕獲した雲雀のこと。

○廿九日丙申晴晚小雨左会大青来伊生又到

廿九日丙申、晴、晚に小雨。左会あり。大・青来る。伊生又到る。

八月大

○朔丁酉雨上朝拝賀如恒

朔丁酉、雨。朝に上り拝賀すること恒の如し。

○二日戊戌雨鹿兒青大生来柏原信来

二日戊戌、雨。鹿兒・青・大生来る。柏原信来る。

○三日己亥晴直登營井沢生来

三日己亥、晴。直にて營に登る。井沢生来る。

○四日庚子陰時雨詩経会青大伊岡生来（通鑑起業始漢武紀）

四日庚子、陰、時に雨ふる。詩経会あり。青・大・伊・岡生来る。（通鑑起業、漢武紀を始む。）

〔通鑑起業始漢武紀〕『資治通鑑綱目』の前漢の武帝の紀。六月十一日に「綱目開業」。

○五日辛丑陰与青大二生遊王子邨過文蔵翁家久憩帰路根岸里午飴海老店暮餐入谷松下亭蓋蕎店矣狩野八十嬢来宿
五日辛丑、陰。青・大二生と王子邨に遊ぶ。文蔵翁の家に過り、久しく憩ふ。帰路、根岸の里、海老店に午飴す。

暮に入谷の松下亭に餐す。蓋し蕎店なり。狩野八十嬢来り宿す。

「根岸里」上野の台地の東北の地域。現在の台東区根岸。

「入谷松下亭」入谷の蕎麦屋「松下亭」。安政元年開業。

○六日壬寅晴青伊大岡草生来塾小集

六日壬寅、晴。青・伊・大・岡・草生塾に來り、小集す。

○七日癸卯晴大生到金子和輔來話

七日癸卯、晴。大生到る。金子和輔來り話す。

○八日甲辰晴直上營近日英吉利來於崎陽蓋四艦云^(ママ)退途如佐野氏暫話

八日甲辰、晴。直にて營に上る。近日、英吉利崎陽に來る。蓋し四艦と云ふ。」退途、佐野氏に如き、暫く話す。

「英吉利來於崎陽」英国東インド艦隊司令長官スターリング、軍艦四隻を率いて長崎に入港。『統徳川実紀』安政元年八月六日に「此度長崎表^江英吉利西船四艘渡來候処。穩ニ候旨注進有^レ之候。」の記事を収める。

○九日乙巳晴伊青生來左會

九日乙巳、晴。伊・青生來る。左會。

○十日丙午雨大生岩松父子来

十日丙午、雨。大生・岩松父子来る。

○十一日丁未陰青伊大生中根豊八大生之爺来午後与青生拜肅公墳過墨陀乘月而返

十一日丁未、陰。青・伊・大生、中根豊八、大生の爺来る。午後、青生と肅公の墳を拜し、墨陀に過り、月に乘じて返る。

○十二日戊申淡霽松岡肇至

十二日戊申、淡霽。松岡肇至る。

○十三日己酉陰直上宮嘉兵兄来謁晚雨阿瞽一針

十三日己酉、陰。直にて宮に上る。嘉兵の兄来り謁す。晚に雨ふる。阿瞽一針す。

○十四日庚戌雨微湯浅猪助来詩経会伊大青岡四生至

十四日庚戌、雨微かなり。湯浅猪助来る。詩経会。伊・大・青・岡四生至る。

○十五日辛亥陰雨登宮拜賀青生到茲夜暴雨無月初更僅現雲際蓋至夜深皎潔予就眠不看矣小宴招等尼青生宿

十五日辛亥、陰雨。營に登り拝賀す。青生到る。茲の夜、暴雨、月無し。初更僅かに雲際に現る。蓋し夜深に至り皎潔たり。予、眠に就きて看す。小宴、等尼を招く。青生宿す。

「皎潔」態度やようすが白くてけがれの無いこと。

○十六日壬子快霽又陰如倉商家以貨廿円来午後小集晴潭董斎雪江伊青大生到

十六日壬子、快霽又陰。倉商家に如き、以て廿円を貸り来る。午後小集。晴潭・董斎・雪江・伊・青・大生到る。

「倉商家」成島家の蔵宿、伊勢屋。

○十七日癸丑晴大生来了雑事此夜月始皎潔

十七日癸丑、晴。大生来り、雑事を了す。此夜、月始めて皎潔たり。

○十八日甲寅雨来直登營路過林氏謁祭酒及息昇蔵晚来松岡肇来談廿五日納采之事

十八日甲寅、雨来る。直にて營に登る。帰路、林氏に過り、祭酒及び息昇蔵に謁す。晚来、松岡肇来り、廿五日納采の事を談ず。

「納采之事」柳北が狩野董川の娘瀧を妻として迎える結納。

○十九日乙卯暴雨午晴休会青伊大三生来贈狩野氏以肅公遺物晚水亮蔵到

十九日乙卯、暴雨、午に晴る。休会。青・伊・大三生来る。狩野氏に贈るに、肅公の遺物を以てす。晩に水亮蔵到る。

○廿日丙辰雨霏々登殿次講自今日始

廿日丙辰、雨霏々たり。殿に登る。次講、今日より始む。

○廿一日丁巳雨陰製家督賀餅贈諸家小野翁青大伊生来大檢書函

廿一日丁巳、雨、陰。家督の賀餅を製し、諸家に贈る。小野翁・青・大・伊生来る。大、書函を検す。

○廿二日戊午雨梧陰来青生到檢書函贈肅公遺物於諸氏

廿二日戊午、雨。梧陰来る。青生到る。書函を検す。肅公の遺物を諸氏に贈る。

○廿三日己未雨直日登殿參政遠藤但州御側太田隱州相渡書付朝比奈甲州相達曰予明日四時可朝營云歸途過小石川長尾叔家小川佐左来授肅公遺衣云

廿三日己未、雨。直日、殿に登る。參政遠藤但州、御側太田隱州、書付を相渡し、朝比奈甲州相達して曰く、予、明日四時に營に朝すべしと云ふ。歸途、小石川の長尾叔の家に過る。小川佐左来る。肅公の遺衣を授くと云ふ。

○廿四日庚申晴五時過登營泊方^江出届石河濃州也午時於土圭間遠藤但州達曰成島甲子太郎御実紀取立御用可相勤候

又曰祖父図書頭御実紀取立御用当分之内甲子太郎後見相勤候様口達書付渡之蓋平服也御礼於笹之間謁本郷丹州詣但州邸謝蓋予及王父君兼謝也過林祭酒及小林栄帰賀客来飲茲日不開門

廿四日庚申、晴。五時過ぎ、宮に登る。泊方へ届を出す。石河濃州なり。午時、土圭の間に於いて、遠藤但州達して曰く、成島甲子太郎、御実紀取立御用相勤めべく候。又曰く、祖父図書頭御実紀取立御用、当分の内、甲子太郎後見相勤め候様口達し、書付之を渡す。蓋し平服なり。御礼、笹の間に於いて本郷丹州に謁し、丹州邸に詣りて謝す。蓋し予及び王父君の兼謝なり。林祭酒及び小林栄に過り帰る。賀客来り飲す。茲の日、門を開けず。

〔土圭間〕江戸城本丸表の御用部屋の北に当たり、時計が置かれ時刻通報のために奥坊主が詰めていた部屋。

○廿五日辛酉今朝納采於狩野氏水谷亮藏為使贈物五種曰糸錦帯二包一台曰扇子(五本入)一箱曰五嶋鯧二連一台曰昆布一台曰屋内喜多留一荷二樽酒七升入也右終狩野氏以使者贈魚一台樽料二方云授狩野使者及亮藏各一方是日予微邪頻瀉平臥王父君如林氏

廿五日辛酉、陰。今朝、狩野氏に納采す。水谷亮藏為に使す。贈物五種。曰く、糸錦帯二包一台。曰く、扇子(五本入)一箱。曰く、五嶋鯧二連一台。曰く、昆布一台。曰く、屋内喜多留一荷二樽、酒七升入なり。右終り、狩野氏、使者を以て魚一台、樽料二方を贈ると云ふ。狩野の使者及び亮藏おのちに各一方を授く。是の日、予、微邪。頻りに瀉し、平臥す。王父君、林氏に如く。

〔五嶋鯧〕五島列島で採れたイカを開いて干したものだ。

〔屋内喜多留〕柳樽。二本の長い柄をつけた朱塗りの酒樽。祝い事に用いる。

「二方」一分金二枚。

○廿六日壬戌晴疾少愈完戸伊大青生至贈家督賀餅於諸氏午後御実紀出役等十九名来賀供酒飯太闌矣

廿六日壬戌、晴。疾少しく愈ゆ。完戸・伊・大・青生至る。家督の賀餅を諸氏に贈る。午後、御実紀出役等十九名来り賀す。酒飯を供す。太はだ闌たり。

○廿七日癸亥晴大生来午後与王父君始如学館実紀局謁諸属閣諸物祭酒会誘鹿兒秋月及江目芳太至

廿七日癸亥、晴。大生来る。午後、王父君と与に始めて学館実紀局に如く。諸属に謁し、諸物を闌す。祭酒、たまた会ま鹿兒・秋月及び江目芳太を誘ひて至る。

「学館実紀局」昌平坂学問所に併設された『徳川実紀』の編纂局。

○廿八日甲子晴直登殿諏訪庄右飯田咸三遊佐卜庵宮田文吉来渡辺周一至茲日復熱

廿八日甲子、晴。直にて殿に登る。諏訪庄右、飯田咸三、遊佐卜庵、宮田文吉来る。渡辺周一至る。茲の日、復た熱す。

○廿九日乙丑陰鹿兒前田善助大生到伊沢来整書筐茲日英夷船発崎港去追記

廿九日乙丑、陰。鹿兒、前田善助、大生到る。伊沢来る。書筐を整ふ。茲の日、英夷船、崎港を發し去る。追記。

「追記」「茲日」以下の記事を後日追記したことをいうか。

○晦日丙寅晴少熱午前如学館実紀局閱台徳廟紀董叔秋月木村鉄四渡辺周一来夜雨

晦日丙寅、晴、少しく熱し。午前、学館実紀局に如く。台徳廟紀を閲す。董叔、秋月、木村鉄四、渡辺周一来る。夜に雨ふる。

〔台徳廟紀〕〔徳川実紀〕のうち二代將軍秀忠時代のもの。

九月小

○朔丁卯雨登殿拝賀如例達印鑑於會計吏松野熊之助頭取甲州達余有実紀局務故平直日許午牌退朝蓋受御用掛平岡丹州旨云伊沢生来授誦史記

朔丁卯、雨。殿に登る。拝賀、例の如し、印鑑を會計吏松野熊之助に達す。頭取甲州、余、実紀局の務め有る故、平直日は午牌の退朝を許すと達す。蓋し御用掛平岡丹州の旨を受くと云ふ。伊沢生来る。史記を授け誦す。

○二日戊辰織雨上營与狩勝川出画省閱三国画卷茲日家督後御廩証文相濟其写受於田備州加下札返之喚廩商伊勢氏之老小平談手形之事湯浅猪助来

二日戊辰、織雨。營に上る。狩勝川、画を出し三国画卷を省閱す。茲の日、家督後、御廩証文、相濟み、其の写しを田備州に受く。下札を加へて之を返す。廩商伊勢氏の老小平を喚び、手形の事を談ず。湯浅猪助来る。

〔狩勝川〕狩野勝川。

〔御廩証文〕 俸禄の証文。

〔廩商伊勢氏之老小平〕 藏宿伊勢屋の小平老人。

○三日己巳陰冷（今日節係霜降）直升宮午時退而赴学館実紀局閱史茲日回霽甚妍小川忠左来談畧譜之事夜深一雨三日己巳、陰冷。（今日節は霜降に係る。）直にて宮に升る。午時、退きて学館実紀局に赴きて史を閲す。茲の日、回霽、甚だ妍なり。小川忠佐来る。略譜の事を談ず。夜深に一雨あり。

〔略譜〕『寛政重修諸家譜』や『諸家系譜』と同じような幕臣諸家の系譜を整理要約した江戸幕府の編纂物。『江戸幕府編纂物 解説編』によれば、文化年間以後天保末年頃までの書き継ぎがあるという。

○四日庚午曇雨午晴登殿茲日將軍宣下後御佳儀且東台法王及増上寺方丈諸僧御饗有申樂（翁東方朔頼政六浦石橋祝言養老○狂言鶏鴛昆布売）申牌樂畢矣賜午餐酒菓

四日庚午、曇雨、午に晴る。殿に登る。茲の日、將軍宣下の後、御佳儀且つ東台法王及び増上寺方丈の諸僧の御饗、申樂有り（翁、東方朔、頼政、六浦、石橋、祝言養老 ○狂言 鶏鴛、昆布売）。申牌、樂畢る。午餐、酒菓を賜ふ。〔東台法王〕 輪王寺宮慈性法親王。

〔翁〕 以下、能狂言の曲名。

《余説》『続徳川実紀』安政元年九月四日に「將軍宣下相濟候祝儀。且日光御門跡近々御登山二付。御能被仰付候二付。日光御門跡御登城。且又増上寺方丈。其外寺社之輩登宮。」の記事を収める。

○五日辛未雨始開漏室伊大二生來林祭酒有書問実紀局机函之事

五日辛未、雨。始めて漏室を開く。伊・大二生來る。林祭酒、書有り。実紀局机函の事を問ふ。

〔漏室〕湯殿。

○六日壬申雨冷遣弘奴於廩商許受米券案文四枚招小山縫右写之諾去岡伊青生到詩経会談衆評事午後雨歇

六日壬申、雨冷し。弘奴を廩商の許に遣し米券案文四枚を受けしむ。小山縫右を招きて之を写さしむ。諾して去る。

岡・伊・青生到る。詩経会。衆評の事を談ず。午後、雨歇む。

〔案文〕正文と同等の効果を持つ写し。

○七日癸酉雨学館闋史午晴青生來共檢書函大畧畢矣北越中島徳右來贈越雪一器徳蓋予幼時塾生也徳同国阿部順蔵亦予故門人既死其父由右託徳贈麻桌一束可憐焉

七日癸酉、雨。学館にて史を闋す。午に晴る。青生來る。共に書函を檢し、大略畢る。北越の中島徳右來たり。越の雪一器を贈らる。徳、蓋し予の幼時の塾生なり。徳の同国阿部順蔵も亦た予の故門人にして既に死す。其の父由右、徳に託し、麻桌一束を贈らる。憐れむべし。

〔越雪〕越後の干菓子の名。

○八日甲戌暄直上宮託御借米(当夏) 券及七月以来式口俸券於坊主組頭貞伯大生到佐虎來授講孟子
八日甲戌、暄かし。直にて宮に上る。御借米(当夏)の券及び七月以来の式口俸の券を坊主組頭貞伯に託す。大生到る。
佐虎来る。孟子を授け講ず。

○九日乙亥重陽拝賀登殿談系譜之事於林祭酒呈其記箋茲日也快霽暖甚午後鹿兒完生來賀忠助又到与青生如礫川一行院和歌会土父君梧蔭翁先至及尼六名題詩歌呈本覺老晚歸月明本阿正佐贈菓

九日乙亥、重陽。拝賀にて殿に登る。系譜の事を、林祭酒に談じ、其の記箋を呈す。茲の日、也た快霽なり。暖甚だし。午後、鹿兒、完生來り賀す。忠助又到る。青生と礫川の一行院の和歌会に如く。王父君、梧蔭翁、先づ至る。及び尼六名、詩歌を題し、本覺老に呈す。晚に歸る。月明らかなり。本阿正佐、菓を贈る。

〔礫川一行院〕 小石川にある浄土宗の寺。

○十日丙子陰冷雨來過本阿正佐至

十日丙子、陰、冷雨來り過ぐ。本阿正佐至る。

○十一日丁丑霽暖午前拜本所肅君墓佐虎伊大生來塾孟会柏原信到遣広奴米券二通持而託廩商云夜飲于觀月庵月皎風朗

十一日丁丑、霽、暖かし。午前、本所の肅君の墓に拝す。佐虎・伊・大生、塾に來る。孟会なり。柏原信到る。

広奴をして米券二通持せしめて麩商に託すと云ふ。夜、観月庵に飲む。月皎くして風朗らかなり。

○十二日戊寅陰冷午後雨洒

十二日戊寅、陰冷。午後、雨洒ぐ。

○十三日己卯雨霏直上菅呈属史江目芳太渡辺周一願書于祭酒令下曰英吉利国繫船於本邦之事従其請以崎陽箱館二処為之所且賜其薪水糧及闕乏物云青生来招等尼公小飲賦和歌三更雲際現影

十三日己卯、雨、霏たり。直にて菅に上る。属史江目芳太・渡辺周一の願書を祭酒に呈す。令下りて曰く、英吉利国の船を本邦に繋ぐの事、其の請に従ひ、崎陽・箱館の二処を以て、之が所と為す。且つ其の薪・水・糧、及び闕乏の物を賜ふと云ふ。青生来る。等尼公を招き、小飲し、和歌を賦す。三更、雲際に影を現す。

〔令下曰〕英吉利西船船繫御差許令を指す。『続徳川実紀』安政元年九月十三日に「長崎表^江渡来之英吉利西船。(中略)依之向後長崎并箱館之両港江船を寄。薪水欠乏之品々相渡候積。御差許相成。(後略)」の記事を収める。

○十四日庚辰雨未歇前田善助持所写竹堂稿来青伊大三生来詩経会夜秋敬助到説其養室之苦今翌暁月蝕不滿一分不見

十四日庚辰、雨未だ歇まず。前田善助、写す所の竹堂稿を持ち来る。青・伊・大三生来る。詩経会。夜、秋敬助到り、其の養室の苦を説く。今翌暁、月蝕、一分を満たさず。見ず。

〔竹堂稿〕斎藤竹堂の文稿か。

○十五日辛巳雨登殿拝賀如例過実紀局帰往還困泥鹿兒到小藤堂侯宰之兒川口新五入門草薙兒伴来也月明十五日辛巳雨。殿に登る。拝賀、例の如し。実紀局に過りて帰る。往還、泥に困ず。鹿兒到る。小藤堂侯が宰の兒、川口新五入門す。草薙の兒の伴ひ来るなり。月明らかなり。

〔小藤堂侯〕津藩の支藩、久居藩第十五代藩主藤堂佐渡守高聰を指すか。

〔小藤堂侯宰之兒、川口新五〕安政元年『武鑑』には、藤堂佐渡守家の江戸詰用人に「川口弥兵衛」がおり、あるいはその子供か。

眠 ○十六日壬午快晴伊勢久保倉主殿来謁贈足代権大夫書及貽貨午後小集晴潭董斎梧陰酒向敬伊大生到月如昼及五更

十六日壬午、快晴。伊勢の久保倉主殿来り謁し、足代権大夫の書を贈り、及び貨を貽る。午後、小集。晴潭・董斎・梧陰・酒向敬・伊・大生到る。月、昼の如し。五更に及びて眠る。

○十七日癸未晴伊青大生至左氏会贈書及履于青生蓋謝夏来曝書之勞也青木生姉貞来於等行室縫諸衾衣
十七日癸未、晴。伊・青・大生至る。左氏会。書及び履を青生に贈る。蓋し夏来の曝書の勞を謝するなり。青木生の姉貞、等行の室に來り、諸衾衣を縫ふ。

○十八日甲申晴午後少雨直登營過佐野氏謁叔廩商有書謂明朝晴則夏俸及月々俸下營中御史松本十郎兵有書問玄猪佳儀出否

十八日甲申、晴、午後少雨。直にて營に登る。佐野氏に過りて、叔に謁す。廩商、書有りて謂ふ、明朝晴ならば、則ち夏俸及び月々の俸下ると。營中にて御史松本十郎兵、書有りて、玄猪の佳儀の出否を問ふ。

「玄猪佳儀」十月の亥の日に、餅を食べて万病をはらう祝。この年は十月四日に行われた。

○十九日乙酉雨冷錦江君忌日和歌会佐々木江州稲垣欽丞天野弥五篠木大次遠山政光同政友養連寺犬塚喜鈴木善山路市之進鈴木宗休柘植伝太福地右太上山伸之石橋三英鹿兒立等来雑查而至小飲伊青大生来宿

十九日乙酉、雨冷し。錦江君の忌日の和歌会なり。佐々木江州・稲垣欽丞・天野弥五・篠木大次・遠山政光・同政友・養連寺・犬塚喜・鈴木善・山路市之進・鈴木宗休・柘植伝太・福地右太・上山伸之・石橋三英・鹿兒立等来る。雑查して至る。小飲す。伊・青・大生、来り宿す。

「錦江君」成島家の先祖、成島錦江（名を信遍、字を帰徳）。宝暦十年九月十九日没。

○廿日丙戌晴風寒登朝次講孟（許行章訖）至実紀局閱史佐藤駒次来茲当夏借禄米下

廿日丙戌、晴、風寒し。朝に登り、講孟に次す（許行章訖る）。実紀局に至りて、史を閲す。佐藤駒次、茲に来る。当夏の借禄米下る。

「許行章」「孟子」「滕文公章句上」第五章。

○廿一日丁亥快霽始有霜七月以下月俸今日下青伊大来檢法帖類夜如杉本氏及青山氏
廿一日丁亥、快霽。始めて霜有り。七月以下の月俸、今日下る。青・伊・大来る。法帖類を検す。夜、杉本氏及び青山氏に如く。

○廿二日戊子晴雨三日来寒甚有氷如麩商家取借米及扶持払金帰中村健三鹿兒至諸貨會計終完生坂上伸至水谷亮来
夜少暖

廿二日戊子、晴、雨。三日来、寒さ甚だし。氷有り。麩商の家に如き、借米及び扶持の払金を取りて歸る。中村健三・鹿兒至る。諸貨會計終る。完生・坂上伸至る。水谷亮来る。夜少しく暖かし。

○廿三日己丑快晴直登殿実紀局閱史此日狩叔母君提幸皆二女子至宿小飲

廿三日己丑、快晴。直にて殿に登る。実紀局にて史を閲す。此日、狩叔母君、幸・皆二女子を提げ、至り宿す。小飲す。

○廿四日庚寅陰晚来雨叔母君帰青伊大生岡本正太来詩経会茲日衆評開卷頭取達明日及明後日両日中御代替法令出
云

廿四日庚寅、陰。晚来雨ふる。叔母君歸る。青・伊・大生、岡本正太来る。詩経会。茲の日、衆評開卷す。頭取の達するに、明日及び明後日の両日中に、御代替りの法令出つと云ふ。

「御代替法令」將軍が家慶から家定に替つたことにともない武家諸法度が新しく発令されることをいう。翌二十五日に発令された。

○廿五日辛卯風雨登殿於頭取省拝祝御法令出泊方省賀法令出朝比奈甲州達予駒場陪遊之願濟云近頃異邦艦来于大坂海辺夜青山子秋敬助来

廿五日辛卯、風雨。殿に登りて頭取省に於いて御法令を拝視す。泊方省を出で、法令の出づるを賀す。朝比奈甲州、予の駒場陪遊の願濟むと達す。近頃、異邦の艦、大坂海辺に来る。夜、青山子・秋敬助来る。

「異邦艦」プチャーチンの乗る軍艦ディアナ号が大坂に来航し、天保山沖に停泊したこと。『続徳川実紀』九月十七日に「大坂近海露西亜船渡来。諸家警衛。」の記事を収める。

○廿六日壬辰快霽前田善助青大生来檢古筆反古曬束帶冠帽

廿六日壬辰、快霽。前田善助・青・大生来る。古筆、反古を検し、束帶・冠・帽を曬す。

○廿七日癸巳好晴曉起理髮登殿既黎明小林小南亦会焉辰牌自羽根橋過吹上苑楓葉殊鮮行青山通御供弓二人有之(蓋赤坂御溝也)至駒場原眺觀豁如松樹篠叢耳大君着伊達羽織者(紫地白章葵くづし)及扈從内臣多着焉參政鳥居丹州御側森川豆州本陪而本郷丹州夏目左將監蜷川相州先到于原俟台駕之至而謁焉上佩白磨上馬調習數回諸大臣内臣皆調馬妍麗不可口耳遂馳驅而遶篠中放鷹馳犬得鶉數十貫之葉竹予先至憩亭酸茗大駕繼踵須臾又至于原上及内臣皆

騎而匣原一回至御建場看両番士驅馬番頭御目付皆各五采羽織番士皆每隊出五人伍各異裝或紅或紫或朱点或偏班番頭用麾御目付淺野一学成前驅同遠山金四為後殿奔馬而一匣如電流也畢至同所御用邸上午飴予与林南及川村助治至邸預植村氏而飴則從駕而歸至吹上苑放鷹逐白鷺不得也歸營已近晚則出頭取省而謝返家已上灯前也大生來夜雨

廿七日癸巳、好晴。曉起し、髪を理へ、殿に登る。既に黎明なり。小林・小南も亦た会す。辰牌、羽根橋より、吹上苑を過る。楓葉殊に鮮やかなり。青山通を行くに、御供弓二人これ有り（蓋し赤坂御溝なり）。駒場原に至れば、眺觀豁如として松樹篠叢のみなり。大君、伊達羽織なる者（紫地白章葵くづし）を着る。扈從内臣に及ぶまで多く着す。参政鳥居丹州・御側森川豆州は本陪して、而して本郷丹州・夏目左將監・蜷川相州は先づ原に到りて、台駕の至るを俟ちて謁す。上は白麾を佩び、馬に上り、調習すること數回、諸大臣内臣皆調馬すること、妍麗、口にすべからざるのみ。遂に馳驅して篠中を遶り、鷹を放ち、犬を馳す。鶉數十を得て、之を葉竹に貫く。予、先に憩亭に至りて、茗を醸す。大駕、踵を継ぐこと須臾にして、又た原に至る。上及び内臣、皆騎して原を匝ること一回、御建場に至り、両番士の馬を驅るを見る。番頭・御目付皆各五采羽織なり。番士皆每隊五人を出し、伍して各装を異にす。或ひは紅、或ひは紫、或ひは朱点、或ひは偏班なり。番頭、麾を用ふ。御目付淺野一学、前驅と成る。同じく遠山金四、後殿と為る。馬を奔せて一匝すること電流の如きなり。畢りて同所の御用邸に至り、上午飴す。予と林・南、及び川村助治も邸預の植村氏に至り、而して飴す。則ち駕に従ひて歸る。吹上苑に至り、鷹を放ち、白鷺を逐はしむるも得ざるなり。營に帰れば已に晩に近し。則ち頭取省に出でて謝す。家に返るは已に灯を上らす前なり。大生来る。夜、雨ふる。

〔羽根橋〕江戸城の本丸から吹上苑に出る濠にかかる西桔橋。

「吹上苑」江戸城西の丸の背後にある苑地。

「駒場原」「駒場野」道玄坂より乾の方十四、五町斗を隔てたり。代々木野より続きたる広原にして、上目黒村に属す。雲雀、鶉、雉、兎の類多く、御遊獵の地なり。此地の官林は享保の初め、御狩場に定めさせられたりとなり。」

(「江戸名所図会」)

「伊達羽織」人の目につく華美な羽織。

《余説》『続徳川実紀』安政元年九月二十七日に「駒場野御放鷹(中略)一今五時之御供揃二而。為御鷹野駒場野^江被^レ為^レ成。」の記事を収める。

○廿八日甲午直朝営出頭取省昨日之謝告田備州過昌平実局帰茲日晴風暖至昨日聞大坂異船則俄羅斯云御目付大久保右将監出府而如京師

廿八日甲午。直にて營に朝す。頭取省に出で、昨日の謝を田備州に告げ、昌平実局に過りて帰る。茲の日、晴風、暖至る。昨日、大坂の異船は則ち俄羅斯なりと云ふを聞く。御目付大久保右将監、府を出で京師に如く。

○廿九日乙未晴青生来佐虎伊生来左氏会檢反古及筐

廿九日乙未、晴。青生来る。佐虎・伊生来る。左氏会。反古及び筐を檢す。

十月大

○朔日丙申快霽寒氣始烈霜華滿瓦登殿奉賀如例井沢佐野大和生至
朔日丙申、快霽。寒氣始めて烈しく、霜華、瓦に滿つ。殿に登り、奉賀、例の如し。井沢・佐野・大和生至る。

○二日丁酉晴青生來掃庫樓晚雨乍暖伊生來地震微動夜雷數轟青山來

二日丁酉、晴。青生來る。庫樓を掃ふ。晚、雨乍ち暖かなり。伊生來る。地震微動す。夜、雷數^{しば}轟く。青山來る。

○三日戊戌晴或陰直登營聞昨參政松平玄蕃頭殿免蓋実卒矣過実紀局茲日受切米手形御印成則遣廩商之許營中宗門
改書調印終返于書役小川佐左杉恒移來茲日暖甚夜到五更後寐

三日戊戌、晴、或は陰。直にて營に登る。昨、參政松平玄蕃頭殿の免ぜらるるを聞く。蓋し実は卒せしならん。
実紀局に過る。茲の日、切米手形を受く。御印成れば則ち廩商の許に遣す。營中、宗門改書、調印終り、書役に
返す。小川佐左・杉恒移來る。茲の日、暖甚だし。夜、五更に到て後、寐ぬ。

《余説》『続徳川実紀』安政元年十月二日に「參政以病免賜時服」の記事を収める。

○四日己亥晴玄猪佳儀未刻半登營以刺達御史於大広間縁頼久待初更少過於黒書院拜領黄餅一顆蓋六人一行也二更
前返家

四日己亥、晴。玄猪の佳儀。未の刻半に營に登る。刺を以て御史に達し、大広間縁頼に於いて久しく待つ。初更
少しく過て、黒書院に於いて黄餅一顆を拜領す。蓋し六人一行なり。二更前、家に返る。

○五日庚子霽伊大生来宿將從鴻台之遊也小山縫右佐久間庄次津田玉芝来夜雨灑来甚暖小集到四更而臥
五日庚子、霽。伊・大生、来り宿す。將に鴻台の遊に從はんとするなり。小山縫右・佐久間庄次・津田玉芝、来る。
夜、雨灑ぎ来る。甚だ暖かし。小集、四更に到りて臥す。

○六日辛丑陰曉起秋山忠来誘即提伊大生及弘奴從兩國散歩到佐葛西渡猶巳牌前矣霧雨一灑乍霽訪市川金子某家啜
茗食搏飯至市川番戌渡利根渡到鴻台総寧寺寺災後僧寓於寺傍葉師院則叩扉請看古戰場僧則指導往昔見北条城墟
碑墳存矣唯喬松乱篠空有慘悽思盤旋高下出一邱赤壁臨利川田疇遠樹依々渺々遥看江城就中富岳聳天半奇怪不可口
耳頂有大觀堂々有八勝云趁田徑到真間弘法寺国分寺楓葉半染看手兒名明神祠及繼橋古蹟可憐矣又因前路散行至忠
助爺石弥兵家已上灯供酒餅初更後從佐葛西上舟入楯川着泉橋至家過二更不更疲也一洗脚就枕

六日辛丑、陰。曉起す。秋山忠、来り誘ふ。即ち伊・大生及び弘奴を提て、兩國より散歩し佐葛西の渡に到る。
猶ほ巳牌前なり。霧雨一たび灑ぎ、乍ち霽る。市川の金子某の家を訪ぬ。茗を啜り搏飯を食ひ、市川番戌に至る。
利根の渡を渡り、鴻台の総寧寺に到る。寺災後、僧は寺傍の葉師院に寓す。則ち扉を叩き古戰場を看んことを請ふ。
僧則ち往昔の里見・北条の城墟を指導す。碑墳存す。唯だ喬松・乱篠の空しく有るのみ。慘悽として思ひ盤旋たり。
高下して一邱に出れば、赤壁、利川に臨み、田疇遠樹、依々渺々として遙かに江城を看る。就中、富岳天半に聳え、
奇怪口にすべからざるのみ。頂に大觀堂有り。堂に八勝有りと云ふ。田徑を趁ひて真間の弘法寺・国分寺に到る。
楓葉、半ば染む。手兒名明神祠及び繼橋の古蹟を看る。憐れむべし。又、前路に因りて散行し、忠助爺・石弥兵

の家に至る。已に灯を上し、酒餅を供す。初更後、佐葛西より、舟に上り、楯川に入り、泉橋に着き、家に至る。二更を過ぐ。更に疲れざるなり。一たび脚を洗ひ、枕に就く。

〔佐葛西渡〕 さかさいのわたし。逆井の渡し。

〔市川番戌〕 市川の関所。

〔鴻台総寧寺〕 国府台の総寧寺。

〔搏飯〕 タンパン。握り飯。

〔楯川〕 豎川のこと。本所の地を東西に直流し、逆井の渡と隅田川とをつなぐ。

〔泉橋〕 和泉橋のこと。神田川にかかる。

《余説》『寒檠小稿』にこの吟行の詩を多数収める。

○七日壬寅晴青大生来晒僕鎧名倉久三至

七日壬寅、晴。青・大生来る。僕の鎧を晒す。名倉久三至る。

《余説》『寒檠小稿』に「余、鴻台に遊ぶ。青木子中、伴を約す。而るに疾有りて至らず。乃ち楓一枝を折り以て贈る」詩を収める。

○八日癸卯霽直登營賜去玄猪御手歌賃三顆過実紀局水谷亮藏来

八日癸卯、霽。直にて營に登る。去る玄猪の御手歌賃三顆を賜る。実紀局に過る。水谷亮藏来る。

「手歌賃」てかちん。將軍手づから給う餅。

○九日甲辰晴小藤堂侯臣結城銅吉入門檢収器皿伊沢生到觀月庵蕎酒供

九日甲辰、晴。小藤堂侯の臣結城銅吉、入門す。器皿を檢収す。伊沢生到る。觀月庵にて蕎酒を供す。

○十日乙巳陰登殿与狩野氏出縁組御内意窺于田村備州青生到夜雨蕭々

十日乙巳、陰。殿に登る。狩野氏と出づ。縁組御内意、田村備州に窺ふ。青生到る。夜雨、蕭々たり。

「縁組御内意」柳北と狩野董川の娘澗との縁組についての許可の内意を伺ったのである。

「田村備州」田村備後守直簾。小納戸頭取。

○十一日丙午大南風雨乍晴青伊大生来閱紙筐遣弘生於本法寺掃肅公墓晚曇雨数点小山縫右来託転仕之事夜霽月皎
茲日暴暖

十一日丙午、大南風、雨、乍ち晴る。青・伊・大生来る。紙筐を閲す。弘生をして本法寺に肅公墓を掃はしむ。晩に曇り、雨数点。小山縫右来り、転仕の事を託す。夜霽れ、月皎たり。茲の日、暴かに暖かし。

○十二日丁未陰又霽大生来掃庫忠助到

十二日丁未、陰又霽。大生来る。庫を掃ふ。忠助到る。

○十三日戊申雨直営諏訪房州談三河記之事大生到茲日寒始烈齒痛

十三日戊申、雨。営に直す。諏訪房州、三河記の事を談ず。大生到る。茲の日、寒、始めて烈し。齒痛。

〔諏訪房州〕 諏訪条之丞。安房守。御小姓頭取。

〔三河記〕 徳川家創業史の一つ。大久保忠教著の『三河物語』と重複する部分がある。

○十四日己酉晴少感邪小川佐左至三生来詩経会完生至月明茲日齒痛過昨

十四日己酉、晴。少しく邪を感ず。小川佐左至る。三生来る。詩経会。完生至る。月明らかなり。茲の日、齒痛、昨に過ぐ。

○十五日庚戌晴又陰齒痛未愈登殿拜賀如例予縁組御内意窺於平岡石州相濟兵庫頭達謁祭酒借三河記三卷于諏訪房州午後矢口清三歸自蝦夷来話蛮地状体忠助到飯田咸三至阿瞽来針蚤臥

十五日庚戌、晴又陰。齒痛、未だ愈ず。殿に登る。拜賀、例の如し。予が縁組の御内意、平岡石州に窺ひ、相濟む。兵庫頭達す。祭酒に謁す。三河記三卷を諏訪房州に借す。午後、矢口清三、蝦夷より帰り来り、蛮地の状体を話す。忠助到る。飯田咸三至る。阿瞽来り針す。蚤く臥す。

〔平岡石州〕 平岡石見守頼啓。御小姓番頭格式。

〔借〕〔借ス〕と原本に送り仮名が附してある。

○十六日辛亥晴、雨痛尚不瘳、完戸鑑次来、謁杉本忠達、至午後小集、関雪江、晴潭、董斎、金蓑香、三生来、風邪未快、蚤寐。
十六日辛亥、晴。雨痛、尚ほ瘳えず。完戸鑑次、来り謁す。杉本忠達至る。午後、小集。関雪江、晴潭、董斎、金蓑香、三生来る。風邪、未だ快ならず。蚤く寐す。

《余説》『寒檠小稿』卷一に「霜曉 分人迹板橋霜句為韻得述字 十月十六日小集」と題する詩を収める。

○十七日壬子霽、風少快、今日晝工来、新席大生、自今日携午餐来、学

十七日壬子、霽、風少しく快し。今日、晝工来り、席を新にす。大生、今日より午餐を携へ来り学ぶ。

○十八日癸丑霽、或陰寒、風邪少快、一酌而直、菅董叔亦会、因出縁組願于朝比甲州、達泊方森川伊豆殿、参政遠藤但州殿、大生到、北角仙次来、阿瞽来、針茲日、節係大雪寒烈

十八日癸丑、霽、或ひは陰、寒し。風邪、少しく快し。一酌して、菅に直す。董叔も亦た会す。因て縁組願を朝比甲州に出し、泊方森川伊豆殿・参政遠藤但州殿に達す。大生到る。北角仙次来る。阿瞽来り針す。茲の日、節は大雪に係り、寒烈し。

○十九日甲寅晨雨一過、終日曇、晴青、大伊来、左氏会、邪氣先瘳、一浴

十九日甲寅、晨に雨一過す。終日、曇晴。青・大・伊来る。左氏会。邪氣、先づ瘳ゆ。一浴す。

○廿日乙卯晴登營次講孟子陳代章茲日因州侯邸火閣老參政登殿大生來檢拭佩刀数把
廿日乙卯、晴。營に登る。孟子陳代の章を講ずるに次す。茲の日、因州侯邸に火あり。閣老・參政、殿に登る。
大生來る。佩刀数把を檢拭す。

〔陳代〕『孟子』「滕文公章句下」の「陳代曰」に始まる部分。

○廿一日丙辰霽糊障工來平野雄三來話大伊生來落花再開

廿一日丙辰、霽。糊障工來る。平野雄三來り話す。大・伊生來る。落花、再び開く。

○廿二日丁巳晴小川佐左名倉久三至整筐筥

廿二日丁巳、晴。小川佐左・名倉久三至る。筐筥を整ふ。

○廿三日戊午霽直營此日上御於黒書院聽幸若大夫音曲予与小林栄請拝聽之蓋謠者五人也日盱退歸

廿三日戊午、霽。營に直す。此の日、上、黒書院に御し、幸若大夫の音曲を聴く。予と小林栄と請て、之を拝聽す。
蓋し謠者五人なり。日盱くればて退歸す。

○廿四日己未晴青大伊生來無詩講董叔提春兒來談婚事

廿四日己未、晴。青・大・伊生來る。詩講無し。董叔、春兒を提て來り、婚事を談す。

○廿五日庚申霽赴林祭酒許小集四五輩来会賦五七律各一首入夜返家青生宿忠郎来

廿五日庚申、霽。林祭酒の許の小集に赴く。四五輩来り会す。五七律各一首を賦す。夜に入て、家に返る。青生宿す。忠郎来る。

《余説》『寒檠小稿』卷一に「賦得鷄声茅店月林祭酒小集十月念五」と題する五律一首を収める。

○廿六日辛酉晴蚤起掃家宅煤三生来援終日擾忙至晚畢矣一浴一飲

廿六日辛酉、晴。蚤起す。家宅の煤を掃ふ。三生来り援く。終日、擾忙。晩に至て畢んぬ。一浴、一飲す。

○廿七日壬戌晴大生到薩州夫人贈菓一筥晩雨

廿七日壬戌、晴。大生到る。薩州夫人、菓一筥を贈らる。晩、雨。

○廿八日癸亥晨霽暖直営過実紀局観月庵掃塵晚来供麦及酒使弘治持来月米券往勢店

廿八日癸亥、晨に霽れ、暖和なり。営に直す。実紀局に過る。観月庵に塵を掃ふ。晚来、麦及び酒を供す。弘治をして、来月の米券を持たせ、勢店へ往かしむ。

〔勢店〕成島家の蔵宿伊勢屋。

○廿九日甲子陰製肅莊公一回忌蒸餅贈諸家蓋三十戸也餅數五百二十五也又製真如院殿二十三回忌蒸餅贈狩野万年小南三親族大伊生名倉久三至

廿九日甲子、陰。肅莊公一回忌の蒸餅を製し、諸家に贈る。蓋し三十戸なり。餅數、五百二十五なり。又、真如院殿二十三回忌の蒸餅を製し、狩野・万年・小南の三親族に贈る。大・伊生、名倉久三至る。

〔真如院殿〕未詳。

○晦日乙丑晴青生來廩商報玉落在明朝

晦日乙丑、晴。青生來る。廩商、玉落の明朝に在るを報ず。

十一月小

○朔日丙寅好霽登殿拜賀如例面祭酒觀月庵逢本覺老佐虎及三生到

朔日丙寅、好霽。殿に登る。拜賀、例の如し。祭酒に面す。觀月庵に本覺老に逢ふ。佐虎及び三生到る。

○二日丁卯晴或陰大風捲砂如廩商許受冬俸払金來午後赴学館觀史大生到夜暖雨灑遠雷微電

二日丁卯、晴或は陰。大風、砂を捲く。廩商の許に如き、冬俸の払ひ金を受け來る。午後、学館に赴き、史を觀る。大生到る。夜暖かく、雨灑ぐ。遠く雷し、微かに電す。

○三日戊辰冬至今晚五更湯島台下火北風烈吹火焰襲来闔家擾々収什器于庫到曙而熄完伊生及忠助来暗晨陰霰灑直
嘗謁祭酒談後鑑之事大生到柏原本阿弥来夜蕎麦投与闔室觀月庵酒餅供

三日戊辰、冬至。今晚五更、湯島台下に火あり。北風烈しく吹き、火焰襲来す。闔家擾々として什器を庫に収む。
曙に到て熄む。完・伊生及び忠助来り暗らふ。晨陰り、霰灑ぐ。嘗に直す。祭酒に謁し、後鑑の事を談ず。大生到る。
柏原、本阿弥来る。夜、蕎麦を闔室に投与す。觀月庵に酒餅を供す。

〔湯島台下〕現在の文京区湯島二丁目から三丁目あたり。

〔火焰襲来〕『武江年表』当日の項に「暁、丑半刻、妻恋坂下町火事」とある。

〔後鑑〕江戸幕府によつて編纂された室町幕府十三代の編年体歴史書。柳北の父稼堂が編集の中心であつた。

○四日己巳霽寒氷朝辰牌後地俄震屋宇揺蕩池水沸騰拍岸滾泥暫而止寒未曾有之奇変也青大伊生来詩経会小川佐左
来夜青山子来話終日時々小地動入夜七震

四日己巳、霽、寒氷。朝の辰牌後、地、俄かに震ふ。屋宇揺蕩、池水沸騰して岸を拍ち泥を滾す。暫くして止
む。寒に未曾有の奇変なり。青・大・伊生来る。詩経会。小川佐左来る。夜、青山子来り話す。終日時々、小し
く地動く。夜に入り七たび震ふ。

〔地俄震〕安政元年十一月四日の「安政東海地震」。

○五日庚午与三生拝肅公墓談法事於寺僧与金若干過寒菊金三家杉忠達来三生糊障秋月来茲日地又数微震夜二更浅

草金龍山陰火風急聖天街馬道三谷河岸花川戸多係災奔喧坂上氏到五更熄

五日庚午。三生と肅公の墓を拝す。寺僧に法事を談じ、金若干を与ふ。寒・菊・金三家に過る。杉忠達来る。三生、障に糊す。秋月来る。茲の日、地、又数しば微震す。夜二更、浅草金龍山の陰きたに火あり。風急にして、聖天街、馬道、三谷河岸、花川戸、多く災に係る。奔て坂上氏を喧ふ。五更に到りて熄む。

〔法事〕十一月十一日の柳北の父稼堂の一周忌を指す。

〔火〕『武江年表』の当日「五日亥刻、浅草聖天町より出火」とある。

〔浅草金龍山〕浅草寺。

〔聖天街〕待乳山聖天近辺。

〔馬道〕浅草寺東側の道。

〔三谷河岸〕山谷。現在の台東区東浅草・日本堤・今戸・清川にまたがる地域。

〔花川戸〕現在の台東区花川戸。

○六日辛未霽山田要人来贈大菑不面大生来地尚微揺青生晚到

六日辛未、霽。山田要人来り、大菑を贈る。面せず。大生来る。地、尚ほ微かに揺る。青生、晩に到る。

〔大菑〕大根。

○七日壬申晴朝曇寒甚三生糊障

七日壬申、晴。朝は曇り、寒甚だし。三生、障に糊す。

○八日癸酉陰寒雨一点又晴直宮内藤宮内達令地震荐臻避之戒火云至今日地尚両三動伊大生来糊障此日過実局山口千太来謁

八日癸酉、陰。寒雨一点、又晴る。宮に直す。内藤宮内、令を達す。地震、荐りに臻れば之を避け、火を戒めよと云ふ。今日に至るも、地、尚ほ両三動く。伊・大生来り障に糊す。此の日、実局に過る。山口千太来り謁す。

〔内藤宮内〕内藤宮内小輔矩正。小納戸頭取。

〔令〕『統徳川実紀』安政元年十一月六日「地震立退方之令」か。

〔実局〕昌平饗中に置かれた『徳川実紀』編纂のための部局。実紀局。

○九日甲戌陰雨灑雜事陸続地未穩

九日甲戌、陰、雨灑ぐ。雜事陸続たり。地、未だ穩やかならず。

○十日乙亥晴肅公一回忌逮夜雜事輻湊衆賓来飲青小川二子宿夜霰

十日乙亥、晴。肅公一回忌の逮夜。雜事輻湊す。衆賓来り飲す。青・小川二子宿す。夜、霰。

○十一日丙子晴曉起与等尼阿復青生自泉橋中邨舍放舟到法恩約上陸本法寺一周法会親族弟子来参各供醪飴晚又乘

艇到二州柏亭小飲買醉而返既近二更青生宿

十一日丙子、晴。曉起す。等尼、阿復、青生と泉橋中邨舎より舟を放ち、法恩約に到り、本法寺に上陸す。一周法会なり。親族弟子来り参じ、各の醪飴を供す。晚、又、艇に乗り二州に到る。柏亭に小飲し、酔を買ひて返る。既に二更に近し。青生宿す。

〔泉橋中邨舎〕 和泉橋の船宿、中村屋。

〔法恩約〕 本所横川に架かる法恩寺橋。

〔本法寺〕 成島家の菩提寺。

〔一周法会〕 柳北の父稼堂の一周忌の法事。

〔二州〕 両国。

〔柏亭〕 東両国の料亭柏屋。

○十二日丁丑晴此日予始除服石橋三英来小川佐左青山芳太来各授黄貨蓋有故也月色皎潔

十二日丁丑、晴。此の日、予、始めて除服す。石橋三英来る。小川佐左、青山芳太来る。各^{おのおの}黄貨を授く。蓋し

故有ればなり。月色皎潔たり。

〔黄貨〕 金貨。

○十三日戊寅晴寒甚直営過実紀局遣京藏持来月俸券使勢店小普請支配小笠原順三郎有書問深見寿太郎及予転邸之

事大生来近日聞説去四日大地震小川町赤坂本所芝等尤甚屋宇或覆大城大手牆少壞其余多奇話又聞駿遠三及伊賀伊勢相模亦甚道路不通箱根山壞藤川澗云下田港怒濤高二丈余来撲市陌人馬尽歸烏有諸官僅以身免蛮船二少毀損云実大怪事矣余未詳聞耳

十三日戊寅、晴。寒さ甚し。宮に直す。実紀局に過る。京藏をして来月の俸券を持たせ、勢店に使ひせしむ。小普請支配小笠原順三郎、書有りて、深見寿太郎及び予の転邸の事を問ふ。大生来る。近日、聞説く、去る四日大いに地震ひ、小川町・赤坂・本所・芝等、尤も甚し。屋宇或ひは覆り、大城大手の牆、少しく壞る。其の余、奇話多し。又聞く、駿・遠・三及び伊賀・伊勢・相模も亦た甚し。道路不通、箱根山壞れ、藤川澗ると云ふ。下田港、怒濤高さ二丈余来り、市陌を撲ち、人馬尽く烏有に帰す。諸官、僅かに身を以て免る。蛮船二、少毀損すと云ふ。実到大怪事なり。余、未だ詳かに聞かざるのみ。

〔俸券〕米券とも。切米を受け取るための券。

〔勢店〕成島家の蔵宿伊勢屋。

〔蛮船二〕原本半ば虫損。下田港停泊中に津波の被害を受けたロシア船二隻。

○十四日己卯晴午後風寒完大生来

十四日己卯、晴。午後風寒し。完・大生来る。

○十五日庚辰晴登殿拝賀如例大生来秋月来話夜地震両三回

十五日庚辰、晴。殿に登る。拝賀、例の如し。大生来る。秋月来り話す。夜、地震ふこと兩三回。

○十六日辛巳晴晚雨詩会金子酒向及三生来青生宿夜初雪

十六日辛巳、晴、晩に雨ふる。詩会。金子、酒向及び三生来る。青生宿す。夜、初雪。

○十七日壬午乍晴此日狩野氏遣八嬢什器到蓋二担也投其使价金若干雜事蝟集

十七日壬午、乍ち晴る。此の日、狩野氏、八嬢を遣はず。什器到る。蓋し二担なり。其の使价に金若干を投ず。雜事、蝟集す。

○十八日癸未晴今晚五更入寒除服後始正服而拜八幡稻荷祠先唁寒中三線溝新橋神田橋外回勤終直営談北角氏退散
如田橋二府番街小川丁^{マヅ}回勤終過小南万年氏小川佐三佐野虎五来至曙而寐

十八日癸未、晴。今晚五更、寒に入る。除服後、始めて服を正して、八幡・稻荷祠を拜し、先づ寒中を唁ふ。三線溝、新橋、神田橋外を回勤し終る。営に直す。北角氏と談ず。退散して田橋二府に如く。番街、小川丁を回勤し終る。小南、万年氏に過る。小川佐三、佐野虎五来る。曙に至て寐る。

○十九日甲申晴青大生来小川佐左来談婚事

十九日甲申、晴。青・大生来る。小川佐左来り婚事を談ず。

○廿日乙酉晴登殿次講孟周霄問全章退後永田場溜池外桜田八代洲常盤橋寒訪畢過佐野叔許伊生來

廿日乙酉、晴。殿に登る。講に次す。孟周霄問全章なり。退きて後、永田場、溜池、外桜田、八代洲、常盤橋を寒訪し畢る。佐野叔の許に過る。伊生來る。

〔孟周霄問〕『孟子』滕文公章句下の第三章「周霄問」。

○廿一日丙戌晴高山良之助來謁午後礫川市谷茗溪寒訪回勤董叔來

廿一日丙戌、晴。高山良之助來り謁す。午後、礫川、市谷、茗溪を寒訪回勤す。董叔來る。

○廿二日丁亥晴三生來北角十郎兵到江目芳來夜如青山氏矢口謙齋贈蝦夷産器數品

廿二日丁亥、晴。三生來る。北角十郎兵到る。江目芳來る。夜、青山氏に如く。矢口謙齋、蝦夷産の器數品を贈る。

○廿三日戊子陰直菅屋敷相對替願書為頭取一覽出朝比甲州此日縁組願相濟遠藤但州以金阿弥(同朋頭石川)達御書付(御書付以承附返上)謝謁泊方省如月番閣老松平伊賀守参政本庄藝州取扱参政遠但州及御用掛衆邸拜之雨織々廿三日戊子、陰。菅に直す。屋敷相對替願書を頭取一覽の為、朝比甲州に出す。此の日、縁組願相濟む。遠藤但州、金阿弥(同朋頭石川)を以て御書付を達す。(御書付、承り附けを以て返上す。)泊方省に謝謁す。月番閣老松平伊賀守、参政本庄藝州、取扱参政遠但州及び御用掛衆の邸に如き、之を拜す。雨織々たり。

〔相對替〕当事者双方の合意に基づいて田畑・屋敷などを交換すること。

○廿四日己丑霽大橋寒訪畢如狩野氏贈劔料廿円青伊大生及佐虎松岡肇至狩野来遣箆筒三長持一也

廿四日己丑、霽。大橋、寒訪し畢る。狩野氏に如き、劔料廿円を贈る。青・伊・大生及び佐虎・松岡肇至る。狩野来る。箆筒三・長持一を遣はずなり。

「劔料廿円」成島家から狩野家への結納金か。安政四年三月二十五日の離婚の際の記述に「携金二十円、これを返す」とある。

○廿五日庚寅陰時雨時晴如石川店換金婚事擾雜青生宿夜雨霏々

廿五日庚寅、陰、時に雨、時に晴。石川店に如き換金す。婚事擾雜たり。青生宿す。夜、雨霏々たり。

○廿六日辛卯雨如烟此日婚儀衆賓雜擾夕申中刻後嫁女輿入儀多抄略与衆賓飲青生宿

廿六日辛卯、雨、烟の如し。此の日、婚儀。衆賓雜擾す。夕、申の中刻後、嫁女、輿入れ。儀多く、抄略す。衆賓と飲む。青生宿す。

○廿七日壬辰雨霏々午晴風小川大和田来

廿七日壬辰、雨霏々たり、午に晴、風。小川、大和田来る。

○廿八日癸巳晴風直営三生来細井安次到此日細君俗称三目祝儀小飲伊生宿小川来

廿八日癸巳、晴、風。宮に直す。三生来る。細井安次到る。此の日、細君、俗に三日と称する祝儀す。小飲す。伊生宿す。小川来る。

「三日祝儀」結婚後三日目の祝事。三日は「ミツメ」。

○廿九日甲午晴明朔日左近殿御通詞之由頭取達大和田爺来謁

廿九日甲午、晴。明朔日、左近殿御通詞の由、頭取達す。大和田の爺来り謁す。

十二月大

○朔乙未晴暄拜賀如例左近将監殿御通詞御召黒羽二重御紋并八丈縞御小袖鷺綿二束拜領出御談部屋謝恩三生来小川鹿兒到

朔乙未、晴、暄かし。拜賀、例の如し。左近将監殿、御通詞す。御召黒羽二重御紋、并に八丈縞御小袖、鷺綿二束拜領す。御談部屋に出て恩を謝す。三生来る。小川、鹿兒到る。

「御談部屋」おだんじべや。御側衆詰所。

○二日丙申淡晴風烈登營左近殿御通詞金拾円從今年拜領云御用掛衆於笹廊謝之且出泊方省退營先歸家飴後御用掛衆邸惣回勤蓋因始賜也過山田氏謁伯母君

二日丙申、淡晴、風烈し。営に登る。左近殿、御通詞にて、金拾円今年より拝領と云ふ。御用掛衆、笹廊に於いて之を謝す。且くして泊方省を出で、営を退く。先づ家に帰り、鉢後、御用掛衆の邸に惣回勤す。蓋し始ての賜に因るなり。山田氏に過り、伯母君に謁す。

〔御用掛衆〕 御側御用取次の呼称。

〔笹廊〕 江戸城の笹之間。

○三日丁酉朝営達小普請支配小笠原順三之組深見壽太与予換邸之願于森川羽州蓋以塩屋中務啓蟻川相州従泊方森川豆州出焉今日賜菓因泰明院殿十三御回忌也雪雨数点又昨夜如青杉南氏寒甚此夜長尾叔兒全橋病痘没
三日丁酉。営に朝す。小普請支配小笠原順三の組の深見壽太、予と換邸の願を森川羽州に達す。蓋し塩屋中務を以て、蟻川相州に啓す。泊方森川豆州より出づ。今日、菓を賜はる。泰明院殿十三御回忌に因るなり。雪雨、数点。又、昨夜、青・杉・南氏に如く。寒甚し。此の夜、長尾叔の兒全橋、病痘にて没す。

○四日戊戌晴三生来詩経納会衛風詠

四日戊戌、晴。三生来る。詩経納会。衛風詠る。

〔衛風〕 『詩経』 国風のひとつ。

○五日己亥晴昨日頭取達今日奥向服紗麻登営余亦登殿頭取達改元安政董叔春兒来供酒桜井眷次到夜如佐野氏半夜

地少震

五日己亥、晴。昨日、頭取、今日奥向、紗麻を服して宮に登るを達す。余も亦た殿に登る。頭取、安政に改元するを達す。董叔・春兒来る。酒を供す。桜井眷次到る。夜、佐野氏に如く。半夜、地少しく震ふ。

○六日庚子晴三橋寅次至

六日庚子、晴。三橋寅次至る。

○七日辛丑晴青生小川来頭取達御書付予明四時登宮云々蓋遠藤但州御渡駒木根大内記殿相渡云

七日辛丑、晴。青生、小川来る。頭取、御書付にて、予、明る四時に宮に登れ云々と達す。蓋し遠藤但州御渡り、駒木根大内記殿相渡ると云ふ。

○八日壬寅晴直日五半時朝宮出泊方省謁大内記殿此日蜜柑二顆賜焉謝御膳番午時於土圭間遠但州達曰予及王父君因編集実紀年々賜銀各十五枚欣々幸々笹廊謝御用掛衆語祭酒及林図書助帰途但州邸及祭酒家廻勤茲日因賜与勘定組頭高橋璉之助有談

八日壬寅、晴。直日、五半時、宮に朝す。泊方省を出で、大内記殿に謁す。此の日、蜜柑二顆賜はる。御膳番に謝す。午時、土圭の間に於いて遠但州達して曰ふ、予及び王父君、実紀を編集するに因て、年々銀各十五枚を賜はると。欣々幸々。笹廊にて御用掛衆に謝す。祭酒及び林図書助と語る。帰途、但州邸及び祭酒家に廻勤す。茲の日、賜に因り、

勘定組頭高橋璉之助と談有り。

〔土圭間〕江戸城本丸表御用部屋の北に当たり、時計が置かれ時刻報知のために奥坊主が詰めていた部屋。

○九日癸卯陰晴時霽夜晴二生来為昨日恩賜小飲到三更後此日左氏会

九日癸卯、陰、晴、時に霽、みぞれ夜に晴る。二生来る。昨日の恩賜の為に小飲し、三更後に到る。此の日、左氏会。

○十日甲辰晴風午後如実紀局訪良斎不逢

十日甲辰、晴、風。午後、実紀局に如く。良斎を訪ぬるも逢はず。

○十一日乙巳与青伊二生拜肅公墓過津田玉芝宅不逢歸途如池端仲街夜再度地震

十一日乙巳。青・伊二生と肅公の墓を拜す。津田玉芝宅に過るも逢はず。歸途、池端仲街に如く。夜、再度地震ふ。

〔池端仲街〕上野不忍池畔の池之端仲町。

○十二日丙午晴暄塙次郎来此日伊勢久保倉但馬始送一万度禱札及曆属吏大久保新太以廿年精勤恩賜銀五枚右祭酒
達来忠達来話夜伊沢来告蒙命因事義赴下田港蓋近日亜墨船来云

十二日丙午、晴、暄かし。塙次郎来る。此の日、伊勢の久保倉但馬、始めて一万度の禱札及び曆を送らる。属吏大久保新太、廿年精勤を以て銀五枚を恩賜さる。右、祭酒達し来る。忠達来り話す。夜、伊沢来り、命を蒙り事

義に因りて下田港に赴くを告ぐ。蓋し近日、亜墨船来ると云ふ。

「二万度」一万度の祓箱の略。

〔曆〕伊勢曆。

○十三日丁未晴直営此日掃煤佳儀如會計局逢高橋璉之助達問合書及銀券案文過実紀局明日納局云

十三日丁未、晴。営に直す。此の日、掃煤の佳儀あり。會計局に如き、高橋璉之助に逢ふ。問合書及び銀券の案文を達す。実紀局に過る。明日、局を納むと云ふ。

〔掃煤佳儀〕十二月十三日の朝、江戸城では老中のなかで最年長の年男が箒で御座所を掃くという行事が行われた。

○十四日戊申晴素読納場無臨講頭取達明日或有達言云中村健三来

十四日戊申、晴。素読、納場す。臨講無し。頭取達するに、明日、或ひは達言有りと云ふ。中村健三来る。

○十五日己酉雨風寒甚登営拝賀如例談會計吏高橋氏及花田鉄次此日換邸請下本多越州以丹阿弥達之泊方省御用掛有謝焉月番閣老松平和泉殿同参政森川羽州及越州邸御用掛衆第回勤歸宅通于御普請奉行河野対州以換邸請濟焉此日搗餅命駿河店也

十五日己酉、雨、風、寒甚し。営に登る。拝賀、例の如し。會計吏高橋氏及び花田鉄次と談ず。此の日、換邸の請下り、本多越州、丹阿弥を以て之を達す。泊方省御用掛、謝有り。月番閣老松平和泉殿、同参政森川羽州及び

越邸、御用掛衆の筈に回勤し帰宅す。御普請奉行河野対州に通ずるに、換邸の請濟むを以てす。此の日、搗餅を駿河店に命ずるなり。

○十六日庚戌陰風或雨詩納会岩舟金小四輩及青大生来石川巳之助入塾此日岡村弥右任隱岐守月明

十六日庚戌、陰、風、或ひは雨。詩納会。岩・舟・金・小四輩及び青・大生来る。石川巳之助入塾す。此の日、岡村弥右、隱岐守に任ぜらる。月明らかなり。

○十七日辛亥晴風節(ツマ)文浅草市使買春具夜嘉平勤年男擲豆如例

十七日辛亥、晴、風あり。節文。浅草市に春具を買はしむ。夜、嘉平、年男を勤む。豆を擲つこと例の如し。

「節文」節分の誤記か。

○十八日壬子晴直営如勘定所談宮田文吉夜伊沢兵九来此日立春

十八日壬子、晴。営に直す。勘定所に如き、宮田文吉と談ず。夜、伊沢兵九来る。此の日、立春。

○十九日癸丑晴有春意左氏納会青生到

十九日癸丑、晴。春意有り。左氏納会。青生到る。

○廿日甲寅晴陰或雨晚訪柏原信宅供酒飯入夜過秋月与秋月如銀局秋田氏談内藤允及其未亡人二更帰宅

廿日甲寅、晴、陰、或ひは雨。晩に柏原信の宅を訪ね、酒飯を供さる。夜に入て秋月に過り、秋月と銀局の秋田氏に如き、内藤允及び其の未亡人を談ず。二更、帰宅す。

「銀局」江戸幕府の銀貨鑄造所。銀座。

○廿一日乙卯晴秋月北角十郎兵至本覚到等行舎清話夜大風

廿一日乙卯、晴。秋月、北角十郎兵至る。本覚到る。等行舎に清話す。夜、大風あり。

○廿二日丙辰霽風製婚儀祝飯贈諸氏十三家青大生来夜如津田氏不逢

廿二日丙辰、霽、風あり。婚儀の祝飯を製し、諸氏十三家に贈る。青・大生来る。夜、津田氏に如くも逢はず。

○廿三日丁巳直営晴暄与花田鉄太有談松岡肇至

廿三日丁巳。営に直す。晴、暄かし。花田鉄太と談有り。松岡肇至る。

○廿四日戊午晴暴暖製祝飯贈諸氏十戸伊熊啓蔵拉兒而至青大生来日如日野店沽春具

廿四日戊午、晴、暴かに暖かし。祝飯を製し、諸氏十戸に贈る。伊熊啓蔵、兒を拉して至る。青・大生来る。日ひるに日野店に如き春具を沽ふ。

〔日野店〕日野屋。池之端仲町の小間物屋。

○廿五日己未陰諸賞畢矣頭取達明日左近殿御通詞云夜如秋田氏談其狛价秀三到二更

廿五日己未、陰。諸賞畢る。頭取達するに、明日、左近殿御通詞と云ふ。夜、秋田氏に如き、其の狛价秀三を談じ、二更に到る。

○廿六日庚申晴登營丹波殿左近殿御同坐於大溜左近殿御通詞御次講賞銀五枚御書冊御風干賞銀三枚拝領御礼無之
小山縫右至柏原信至

廿六日庚申、晴。營に登る。丹波殿・左近殿、大溜に於て御同坐し、左近殿の御通詞にて御次講賞銀五枚、御書冊御風干賞銀三枚拝領す。御礼、之れ無し。小山縫右至る。柏原信至る。

〔大溜〕御座之間上段の南側の大広間。
〔御書冊御風干〕城内曝書のことか。

○廿七日辛酉陰寒秋月大生至近藤繁次郎来始謁夜与秋月如秋田氏四更帰宅

廿七日辛酉、陰、寒し。秋月、大生至る。近藤繁次郎来り始めて謁す。夜、秋月と秋田氏に如く。四更、帰宅す。

○廿八日壬戌晴小山縫右至登營拝賀如例直今日畢矣与花田鍔太談董叔提春兒幸女来夜与秋月如秋田氏談及三更二

更火発筋違内及暁未滅至終朝燼矣到日本橋頭云

廿八日壬戌、晴。小山縫右至る。營に登る。拝賀、例の如し。直、今日畢る。花田鍊太と談ず。董叔、春児・幸女を提て来る。夜、秋月と秋田氏に如き、談、三更に及ぶ。二更、火、筋違内に発し、暁に及び未だ滅せず。終朝、燼に至る。日本橋頭に到ると云ふ。

〔筋違内〕江戸城外郭の門の一つである筋違門の内。『武江年表』安政元年十二月二十八日に「酉下刻、神田多町二丁目北側なる乾物屋三河半次郎が宅より出火して、……二十九日朝五時頃鎮まれり。」の記事を収める。

○廿九日癸亥晴煖雜事輻輳秋月来遣京藏於秋田氏掃室伊沢兵九来

廿九日癸亥、晴、煖かし。雜事輻輳す。秋月来る。京藏を秋田氏に遣はし、室を掃はしむ。伊沢兵九来る。

○晦日甲子好晴嚴霜大烈風捲災場灰来大和田生来如秋田氏晚霞有虹三更就寝 確堂主人

晦日甲子、好晴、嚴霜。大烈風、災場の灰を捲き来る。大和田生来る。秋田氏に如く。晚霞、虹有り。三更、就寝す。確堂主人

『硯北日録』(安政元年) 人名索引(稿)

〔凡例〕

○見出し項目は、本文中の姓名が略されない形を項目とした。一般的に知られた人物などは本文中に書かれなくても、姓などを補った。

○特定の人物を指さずに、漠然と一家をしめす場合などは別に項目に立てた。

○項目名のある箇所は、例えば七月二十六日は⑦26の形で示した。

○項目は、必ずしもよみを特定できないが、常識的と思えるよみで、五十音順に配列した。

○別表記で同一人物と思える場合は項目下の()に別表記形を示し、別表記形でも項目を立て、↓で本見出し形を示した。ただし、青木銀三を青とするなど単純な省略形は項目を立てなかった。

○固有名詞だけでなく、誰その夫人・役職名など、名が知らなくても人物を特定できる場合は、()の)、等の形で立項した。(例：(成島柳北の)母君)。

○同一日に複数回現れる人物も日付は一つにまとめた。

○修姓は、本文に含まれない場合も含めてできるだけ復元した(例：狩↓狩野)。

○女性名の頭に附される「阿」の字は、略した形を項目とした(例：阿復↓復)。

【あ】

青木銀三(青、青木、青木銀)	③20・24・29、④4・14
18・19・20・24・25・27・29、⑤4・6・9・12・14・15・17	
19・20・23・26・28・29、⑥1・3・4・6・8・9・10・11	
12・13・14・15・19・20・21・22・24・25・26・27・28・29・30	
⑦2・3・4・5・8・9・11・12・14・15・16・17・19・20・21・22・24・25・26・27・28・29、	
閏⑦2・4・8・9・11・12・14・16・17・19・20・24・26・29、	
⑧2・4・5・6・9・11・14・15・16・19・21・22・26、⑨6・	
7・9・13・14・17・19・21・24・26・29、⑩2・7・10・11	
19・24・25・30、⑪4・6・10・11・16・19・24・25・26、⑫3・	
7・11・16・19・22・24	
青木新五兵	⑤20
青木生姉貞	⑨17
青山	②11・12・20、③2・5・9・11・14・22・26、
④11・18・27、⑤25、⑦2・17、⑩2	
青山父子	②22
青山元吉(青元吉)	①3、⑦23・25
青山子	①5・11・17・21・28、②3・11、⑨25、⑪4
青山氏	③22、⑤5、⑥2、⑨21、⑪22
青山兎	閏⑦10
青山芳太(青山芳)	③16、④4、⑪12
秋田	⑫20・25・27・28・29・30

秋山敬助 (秋敬助)	① 5 · 21 · 27、⑨ 14 · 25	石井敬丞	閏⑦ 17
秋山忠	⑩ 6	石川	⑪ 23
安積良斎 (良斎)	① 18 · 23、⑫ 10	石河濃州	⑥ 3、⑧ 8
浅野一学	⑨ 27	石川巳之助	⑫ 16
朝比奈甲州 (朝比甲州、甲州)	⑧ 23、⑨ 1 · 25、⑩ 18、⑪ 23	石橋三英 (石橋英)	① 7、⑥ 6、⑨ 19、⑪ 12
足代弘訓 (足代権大夫)	⑨ 16	石弥兵	⑩ 6
阿部順藏	⑨ 7	猪助 ↓ 湯浅猪助	⑩ 6
阿部勢州	① 12、⑤ 18	伊勢氏	⑨ 2
天野狂叟	⑤ 15	市	③ 26
天野弥五	① 4、⑦ 15、⑨ 19	一色邦之輔	⑤ 27
飯田咸三	⑥ 13、⑧ 28、⑩ 15	稲垣欽丞	⑨ 19
伊熊啓藏	⑫ 24	犬塚喜	⑨ 19
伊熊啓藏児	⑫ 24	犬塚赤城	② 9
伊坂竹丞 (伊坂、伊坂竹)	④ 18、⑤ 19、閏⑦ 20	岩 ↓ 岩松董斎	⑧ 10
井沢 (井沢兵九) ↓ 伊沢兵九	④ 18、⑤ 19、閏⑦ 20	岩松父子	⑧ 10
伊沢兵九 (伊、伊沢、井沢、井沢兵九)	① 3 · 28、② 4 · 13 · 17 · 20 · 27、③ 9 · 11 · 16 · 24、④ 3 · 12 · 24、⑤ 2、⑥ 4 · 12 · 21 · 25、⑦ 12 · 24、閏⑦ 4 · 12 · 14 · 20 · 21 · 26 · 29、⑧ 3 · 4 · 6 · 9 · 11 · 14 · 16 · 19 · 21 · 26 · 29、⑨ 1 · 5 · 6 · 11 · 14 · 16 · 17 · 19 · 21 · 24 · 29、⑩ 1 · 2 · 5 · 6 · 9 · 11 · 19 · 21 · 24 · 29、⑪ 3 · 4 · 8 · 20 · 24 · 28、⑫ 11 · 12 · 18 · 29	岩松董斎 (董斎、岩董斎、岩董斎)	① 26、② 12、⑤ 26、⑥ 18 · 22、⑦ 7、閏⑦ 26、⑧ 16、⑨ 16、⑩ 16、⑫ 16
石井弓場	② 26	因州侯	⑩ 20
		植村氏	⑨ 27
		上山伸之	⑨ 19
		江川太郎左衛門	⑥ 27
		越州	⑫ 15

江目芳太（江目芳）……………③ 20・28、⑧ 27、⑨ 13、⑩ 22
遠藤但州（但州、遠但州）……………① 11、⑤ 18、⑧ 23・24、⑩ 18、
⑪ 23、⑫ 7・8

王父君 ↓ 成島司直

大久保右將監……………⑨ 28

大久保新太……………⑫ 12

太田隱州……………⑧ 23

大橋……………⑪ 24

大和田爺（大生之爺）……………⑧ 11、⑪ 29

大和田善太（大、大和、大和田）……………② 12、③ 26、
④ 15・17・18・19・20・21・22・23・25・26・27・29・30、⑤ 2・

6・8・9・11・12・13・14・15・16・17・20・21・22・23・24・25・26・27・

29、⑥ 1・3・4・9・14・19・20・21・22・23・24・26・27・

28・29、⑦ 1・2・4・8・9・10・11・13・15・17・18・21・

23・25・29・30、閏⑦ 4・5・6・7・10・11・12・13・14・15・

19・24・26・29、⑧ 2・4・5・6・7・10・11・14・16・17・

19・21・21・26・27・29、⑨ 5・8・11・14・16・17・19・

24・26・27、⑩ 1・5・6・7・11・12・13・17・18・20・

21・24・27・29、⑪ 2・3・4・6・8・13・14・15・19・24・

27、⑫ 16・22・24・27・30

小笠原順三郎（小笠原、小笠原順三）……………① 14、⑪ 13、⑫ 3

岡野鼎（岡、岡野）……………① 26、② 3・29、③ 28、⑤ 10、閏⑦ 14、
⑨ 9・15・19・22、⑫ 1

⑧ 4・6・14、⑨ 6

岡邑氏……………閏⑦ 1

岡村弥右（隱岐守）……………⑫ 16

岡本……………⑤ 10

岡本正太……………④ 14、⑨ 24

小川健……………⑤ 11

小川佐左（小佐左、小川、小川佐）……………① 5・

11・29、② 3、④ 27、⑥ 4、⑦ 12、閏⑦ 9、⑧ 23、⑩ 3・14・22、
⑪ 4・10・12・18・19・27・28、⑫ 1・7

小川忠佐……………⑨ 3

隱岐守 ↓ 岡村弥右

尾崎謙（謙）……………閏⑦ 13・25

尾崎積善（尾崎謙兄）……………閏⑦ 13・25

小野梧蔭（小野翁、梧蔭、梧蔭）……………閏⑦ 17・26、⑧ 21・22、
⑨ 9・16

伯母君 ↓（山田氏の）伯母君

温 ↓ 成島柳北

確堂主人 ↓ 成島柳北

家君 ↓ 肅莊公

鹿兒立三（鹿兒、鹿兒三、鹿兒立）……………① 16、② 6・

9・19・24、④ 10・11・12、⑥ 21、⑦ 26、閏⑦ 11、⑧ 2・27・29、

⑨ 9・15・19・22、⑫ 1

柏木誠太夫 (柏木誠太)	① 3、⑦ 1	菅	
柏原	⑩ 11 3	菅	
柏原信次 (柏原信)	① 2、③ 4、④ 10、⑦ 4、⑧ 2、⑨ 11、 ⑫ 20・26	完戸鑑次	⑤ 10、⑩ 16
金子蓑香 (金、金子、金蓑香)	⑩ 16、⑪ 5・16、 ⑫ 16	完戸雄三 (完、完戸、完戸雄)	① 7・11・22、 ② 21、④ 13、⑥ 18・22、 ⑦ 3・15・22、 ⑧ 26、⑨ 9・22、 ⑩ 14、⑪ 3・14
金子某		菊	⑩ 6
金子民	① 22	北角	① 11
金子和輔	⑧ 7	北角十郎兵衛 (北角十郎兵)	⑤ 16、⑩ 11、 ⑫ 21
狩野 (狩楚)	① 10・13、⑤ 3、⑥ 7・18、 ⑦ 1、⑧ 19・25、 ⑩ 10・29、⑪ 17・24	北角仙次	① 2、④ 9、 ⑩ 18
狩野叔母 (狩叔母)	③ 5、④ 27、⑥ 30、 ⑨ 23・24	木村熊藏	① 16
(狩野叔母の) 女兒	⑥ 30	木村鉄四	⑧ 30
狩野春川 (春兒)	③ 13、⑥ 7、 ⑦ 26、⑩ 24、 ⑫ 5	橋 ↓ 一橋	
狩野勝川 (狩勝川)	⑨ 2	京藏	⑪ 13、 ⑫ 29
狩野董川 (狩董叔、董叔)	① 6・14、③ 9・13、 ④ 3・20、 ⑥ 7、 ⑧ 26、⑩ 18・24、 ⑪ 21、⑫ 5・28	許行	⑨ 20
⑥ 7、 閏⑦ 26、⑧ 30、 ⑩ 18・24、 ⑪ 21、 ⑫ 5・28	金 ↓ 金子蓑香	金阿弥	⑩ 23
狩野八十嬢 (八嬢)	⑧ 5、⑩ 5、 ⑪ 17	錦江君 ↓ 成島錦江	
嘉平 (嘉兵)	④ 13、⑧ 13、 ⑫ 17	金蓑香 ↓ 金子蓑香	
嘉兵兄	⑧ 13	草 (草生)	⑤ 15、 ⑧ 6
川口新五	⑨ 15	草薙吉五	⑤ 10
川村助治	⑨ 27	草薙児	⑨ 15
寒	⑪ 5	久保倉主殿	① 2・8、 ⑨ 16

久保倉但馬……………⑫ 12
 倉地次郎八(倉地次郎)……………① 2、③ 29
 ↓ 尾崎謙
 謙斎 ↓ 矢口謙斎
 梧蔭(梧陰) ↓ 小野梧蔭
 幸……………⑨ 23、⑫ 28
 ↓ 渡辺広次
 高玉……………⑤ 24
 弘治 ↓ 渡辺広次
 甲州 ↓ 朝比奈甲州
 広奴(弘奴) ↓ 渡辺広次
 河野対州……………⑫ 15
 幸若大夫……………⑩ 23
 小林栄太(小林、小林栄、林、林栄)……………① 8、11、13、③ 7、13、15、16、17、⑤ 17、18、⑥ 26、27、28、⑦ 22、30、
 閏⑦ 1、13、15、16、23、⑧ 24、⑨ 27、⑩ 23
 小林栄達……………② 15
 小平……………⑨ 2
 駒木根大内記(大内記)……………⑫ 7、8
 小南鉉次(小南、小南鉉)……………① 2、9、12、14、⑨ 27、⑩ 29、⑪ 18
 小山縫右(小山縫衛)……………③ 15、⑨ 6、⑩ 5、11、⑫ 26、28
 良斎 ↓ 安積良斎

近藤繁次郎……………⑫ 27
 [さ]

佐……………② 21、⑥ 7
 ↓ (成島柳北の) 細君
 祭酒 ↓ 林祭酒
 坂上氏……………⑪ 5
 坂上玄丈……………① 7
 坂上玄伸(坂上伸)……………④ 1、⑨ 22
 酒向敬(酒向)……………⑨ 16、⑩ 16
 佐久間庄次(佐久間庄)……………④ 3、⑤ 16、⑩ 5
 桜井阿誰……………① 17
 桜井賢次(眷次)……………③ 11、⑫ 5
 左近将監殿(左近殿) ↓ 夏目左近将監
 佐々木江州……………⑨ 19
 貞 ↓ 青木生姉貞
 薩州夫人……………⑩ 27
 佐藤駒次……………⑨ 20
 佐藤新九(佐藤立軒)……………③ 20、⑥ 7
 里見……………⑩ 6
 佐野……………② 2、③ 2、④ 23、⑥ 1、26、⑧ 8、⑩ 1、⑫ 5
 (佐野氏の) 房児……………④ 23
 佐野賢……………⑤ 4

- 佐野叔(佐野氏の叔)……………①7、⑨18、⑪20
 佐野虎五(佐虎)……………③13、⑦7、⑨8・11・29、⑪1・18・24
 山玄活……………①27
 三生……………⑩14・16・26、⑪1・5・7・16・22・28、⑫1・4・9
 塩屋中務……………⑫3
 篠木大次……………⑨19
 島邑孝……………①19、④20
 狩 ↓ 狩野……………④20
 舟 ↓ 舟橋晴潭……………④20
 秋月 ↓ 舟橋晴潭……………④20
 周霄……………⑪20
 秀三……………⑫25
 肅莊公(肅君、肅公、成島恒之助、家君)……………①21・22・25、
 ②1・11・21・22、③10・11・17、④13・18・25、⑤27、⑥5・
 11、閏⑦11・14、⑧11・19・22・23、⑨11、⑩11・29、⑪5・10、
 ⑫11
 狩勝川 ↓ 狩野勝川……………⑫16
 狩董叔 ↓ 狩野董川……………⑫16
 小……………⑫16
 昇藏(林祭酒息)……………⑧18
 小藤堂侯(小藤堂侯)……………④14、⑨15、⑩9
 慎徳公……………⑦22
 真如院殿……………⑩29
 水府線姫君(水府姫君)……………閏⑦7・15
 (水府線姫の)女君……………閏⑦7
 菅沼織部正……………①22
 杉……………①22
 杉恒移 ↓ 杉本忠達……………②21、⑫3
 杉本忠達(杉本、忠達、杉忠達、杉本達、杉恒移)……………①29、②
 2・20、③1・16、④1・4・20・27、⑤5・25、⑥2・26、⑦
 1・19、⑨21、⑩3・16、⑪5、⑫12
 図書頭 ↓ 成島司直……………⑦7
 鈴木益婆(鈴益婆)……………②13、③18
 鈴木善……………⑨19
 鈴木宗休……………①17、②30、③4、⑨19
 (鈴木宗休の)妻……………①17
 諏訪庄右……………⑧28
 諏訪房州……………⑩13・15
 晴潭 ↓ 舟橋晴潭……………⑩13
 清兵 ↓ 太川村清兵……………⑩13
 関雪江(関、雪江)……………①26、②3・12・29、閏⑦18・26、⑧16、
 ⑩16
 雪江 ↓ 関雪江……………⑩16
 全橘 ↓ (長尾氏の兄)全橘……………⑩16

全叔 ↓ (長尾氏の) 全叔	④	27
傍島富丞	④	27
祖父君 ↓ 成島司直		
【た】			
大君 (徳川家定)	⑤	17・18、閏⑦17、⑨27
大内記 ↓ 駒木根大内記		
泰明院殿	⑫	3
高橋氏 ↓ 高橋璉之助		
高橋璉之助	⑫	8・13・15
高柳隆太	④	5
高山良之助	⑪	21
太川村清兵	①	2
滝川嘉衛	①	6
多紀築法印	④	27
武田糸	④	9
竹本長州	②	28
田辺剛	②	29
田辺脩	③	21、18
田辺平三	④	3
田村宗達	⑥	17
田村備州 (田備州)	⑤	17、⑨2・28、⑩10
田安家 (田)	①	12、⑥26、⑪18
潭 ↓ 舟橋晴潭		
丹阿弥	⑫	15
但州 ↓ 遠藤但州		
丹波殿		
竹堂		
忠助 (忠助命)	⑨	9、⑩6・12・15、⑪3
忠達 ↓ 杉本忠達		
忠郎	⑩	25
陳代	⑩	20
柘植伝太	⑨	19
辻龍助	⑦	12、⑦14、⑩5、⑫22
津田	⑦	12、⑦14、⑩5、⑫22
津田玉芝	⑩	5、⑫22
津田信助 (津田信)	④	2、⑥18、⑥19・⑩30
筒井万輔	①	8、④22、⑥11
貞伯	⑨	8
手児名	⑩	6
田 ↓ 田安		
田禮斎		
田備州 ↓ 田村備州	閏	⑦12
渡 ↓ 渡辺広次		
等行尼 (等行、等尼、等尼公)	④	1、⑧15、⑨13・17、⑪11、⑫11

揖斐高・日野俊彦・山口旬・藤井美保子・三浦億人・高橋昭男・蔡維鋼・松原梨佳・結城俊治 『硯北日録』——翻刻・訓読・略注と人名索引 (二)

⑫ 21

董斎 ↓ 岩松董斎	
董叔 ↓ 狩野董川	
東台法王	⑨ 4
藤堂侯	① 19
(藤堂侯の) 孫女	① 19
簡肥州	② 23
遠山金四	⑨ 27
遠山政友	⑨ 19
遠山政光	⑨ 19
徳 ↓ 中島徳右	
徳川家定 ↓ 大君	
鳥居丹州	⑤ 18、 ⑨ 27

【な】

内藤允	⑫ 20
(内藤允の) 未亡人	⑫ 20
内藤宮内	⑤ 19、 ⑫ 20
永井佐渡 (永井佐州)	⑤ 13、 ⑥ 3
長尾叔	⑧ 23、 ⑫ 3
長尾	③ 2、 ⑦ 6
(長尾氏の兄) 全橘	⑫ 3
(長尾氏の) 全叔	⑦ 6

中島徳右 (徳)	⑨ 7
(中島徳右の父) 由右	⑨ 7
中根豊八	② 14、 ③ 21、 ⑥ 7、 ⑧ 11
中村桂次郎	⑤ 4
中村健三 (中村建三、中村健三)	③ 17、 ⑤ 2、 ⑨ 22、 ⑫ 14
中村鋏	⑦ 14
名倉久三	④ 14、 ⑥ 19、 ⑦ 27、 ⑩ 7、 ⑫ 22、 ⑨ 29
夏	③ 5
夏目左近将監 (夏目左将監、左近殿、左近将監殿)	③ 11、 ⑨ 27、 ⑩ 29、 ⑫ 1・2・25・26
成島稼堂 ↓ 肅荘公	
成島錦江	⑨ 19
成島司直 (祖父君、王父君)	① 25、 ⑦ 6、 ⑧ 24、 ⑨ 25、 ⑫ 27、 ⑨ 19
⑨ 9、⑫ 8	
成島恒之助 ↓ 肅荘公	
成島柳北 (成島甲子太郎、温、確堂主人)	⑤ 18、 ⑧ 24、 ⑫ 30
(成島柳北の) 細君 (嫁女)	⑪ 26、 ⑫ 28
(成島柳北の) 母君	③ 25
南	⑤ 18、 ⑥ 27、 ⑨ 27、 ⑫ 3
西村左兵	⑦ 13
二生	⑥ 16、 ⑦ 17

【は】

萩原文左	③	11	舟橋晴潭(舟、潭、舟橋潭、舟橋徴、晴潭、船橋、秋月) ..	①	10
八嬢 ↓ 狩野八十嬢			11 · 26 · ② 6 · 16 · 25 · ③ 5 · 17 · 21 · ④ 1 · 10 · 15 · 22 · ⑤ 4 ·		
花田鉄次	⑫	15	13 · 27 · ⑥ 16 · 18 · 19 · 20 · 30 · ⑦ 2 · 14 · 18 · 閏⑦ 18 · 26 · ⑧		
花田鉄太(花田鍔太)	⑫	23 · 28	16 · 27 · 30 · ⑨ 16 · ⑩ 16 · ⑪ 5 · 15 · ⑫ 16 · 20 · 21 · 27 · 28 · 29		
埴次郎	⑫	12	文藏翁		⑧
母君 ↓ (成島柳北の) 母君			北条		⑩
春兒 ↓ 狩野春川			星野祿三		②
一橋家(橋)	①	12、⑧	28		28
兵庫頭	⑩	15	細井安次		⑥
平岡石州	⑩	15	本阿弥敬		④
平岡丹州	⑨	1	本阿正佐		⑨
平野(平楚)	②	1 · 24、③ 1、⑤ 5	本阿弥		⑩
平野勝之			本覚		③
平野雄三	①	16	①	22、閏⑦ 27、⑨ 9、⑪ 1、⑫ 21
蛭川相州	⑨	27、⑫ 3	本郷丹州		⑨
広永孝次	③	4	本庄藝州		⑧
深見寿太郎(深見寿太)	⑪	13、⑫ 3	本多越中(本多越州)		①
復	⑪	11	②	20、⑤ 18、⑫ 15
福田所左	閏⑦	24	[ま]		
福地石太	⑨	19	前田善助		閏⑦ 19、⑧ 29、⑨ 14 · 26
房兒 ↓ (佐野氏の) 房兒			牧野備州		⑤
藤沢順三(藤沢順)	①	2 · 3 · 19	松岡肇(松肇)		③
				松川成市		④
				松平伊賀守		⑦
				松平和泉		⑧
						⑫
						⑬

松平玄蕃頭 (松平玄蕃) ③ 17、⑩ 3

松平泉州 ⑥ 5

松平大膳亮 ⑥ 28

松野熊之助 ⑨ 1

松本十郎兵 ⑤ 27、⑩ 18

万年 ⑩ 29、⑪ 18

水谷亮蔵 (水亮、水谷亮、水亮蔵) ① 5・21、③ 4・11・15・20、⑤ 27、⑧ 19・25、⑨ 22、⑩ 8

三橋寅次 ⑩ 6

皆 ⑨ 23

未亡人 ↓ (内藤允の) 未亡人 ⑨ 23

宮田文吉 (宮田文) ① 19、⑧ 28、⑫ 18

森川伊豆 (森川豆州) ⑨ 27、⑩ 18、⑫ 3

森川羽州 ⑫ 3・15

【や】

矢口謙斎 (矢口、謙斎、矢口清三) ① 16・25・26、② 9・14・15・17・28、⑩ 15、⑪ 22

矢代久善 ① 12

山口千太 ⑪ 8

山路市之進 ⑨ 19

山田 ⑥ 13、⑫ 2

(山田氏の) 伯母君 ⑫ 2

山田三育 ① 5

山田要人 ⑪ 6

山名岐州 ⑥ 30

湯浅猪助 (猪助) ② 14、⑧ 14、⑨ 2

湯浅伴衛 ② 14

結城銅吉 ⑩ 9

遊佐卜庵 ⑧ 28

養連寺 ⑨ 19

由右 ↓ (中島徳右の父) 由右 ⑨ 19

吉村左一 ② 24

嫁女 ↓ (成島柳北の) 細君 ② 24

【ぶ】

瀧 ↓ (成島柳北の) 細君 ② 24

林 ↓ 小林栄太 ② 24

林栄 ↓ 小林栄太 ② 24

林氏 ⑦ 6、⑧ 18・25

林祭酒 (祭酒) ① 9・12、② 7、③ 13、④ 28、⑤ 3、⑥ 5・8、⑦ 10、⑧ 18・24・27、⑨ 5・9・13、⑩ 15・25、⑪ 1・3、⑫ 8・12

(林祭酒息) ↓ 昇蔵 ⑩ 15・25

林図書助 ⑫ 8

【わ】

林図書助 ⑫ 8

渡辺広次（渡、広奴、弘、弘治、弘奴）……………	① 6、③ 22・29、
閏⑦ 11、⑨ 6・11、⑩ 6・11・28	
渡辺周一……………	⑧ 28・30、
和田春孝……………	⑨ 13
和田半次……………	④ 27
……………	① 11
（山口 旬）	

揖斐高・日野俊彦・山口旬・藤井美保子・三浦億人・高橋昭男・蔡維鋼・松原梨佳・結城俊治
『硯北日録』——翻刻・訓読・略注と人名索引（二）